

鬼一法眼三略卷

作者 文 耕 堂
長谷川千四

第一

眞道は根無うして永く衰り。名は蠶無うして古今に飛ぶ。福は危き事無からんより大いなるはなく。利は害無きより大いなるはなし百花を採得て蜜となして後。知らず辛苦して誰が爲甜からんと。蜂を題せる詩の今此時をさす棹の歌。平の朝臣清盛公熊野詣の沖津詣。風に音なき四の海へ浪靜なる。時とかや。折節播州書寫山の青松院性慶御坊。是も熊野參詣の好き同船と召具せられ。昵近は播磨の大掾平の廣盛。其外家の子郎等ども都に目馴れぬ海山を。今ぞ初めて

三熊野のフシ浦路間近く漕寄する。地清盛仰出さるゝは。是は御僧に似合ひし權現の利生咄。過ぎつる保元元年宇治の左府世を亂り給ひし時。我官軍にて先を駆け忽ち逆臣を鎮めしかば。顯賞行はれ今都督大卿に任ぜられ。我が身の榮華を極むるのみならず。一門共に繁昌する事君の恵とはいへども。多年信じ奉る熊野權現の御利生と覚えたり。今とても帝の守護怠るべきにはあらねども。嫡子小松の重盛に一門附添ひ。左馬頭義朝といふ親を手に懸けし不幸者ながら。源氏の門を絶さず都に残りある上は。些とも朝家に氣遣なし。祈るべきは熊野權現

樂むべきは此船の上。見え渡りたる絶景我數度の參詣に見覺えあり。性慶坊馳走に語つて聞かせん。廣盛もよつく聞けと御扇を差し給ひ。あれ〜向に高く眞黒に聳えしは。いとが山より來る人のなき時は心細くも呼子鳥。ちこそ山と鳴くなれど君も来まで待乳山。ふき上の小野檜原が峰皆此山の續きなり。其方に柵引く赤い雲の。絶間よりよつと頭の見えたるは。藤代峠都より。徒歩路を來れば。五つも六つも七越の嶺百重山。此方の寺は粉川寺けに。誠都にて祇王祇女等が謡ひしも。和歌の浦には名所がござる。一に權現二に玉津鳥三に。さがり藤四に鹽釜も。かたをなみこそこれの場所。もう是切りで覺えぬと御物語の淺義道さ。げに大將の氣質ぞと性慶はそれを感じ入り。よう覺えてと褒めければ廣盛を初め下々まで。

恐ろしくも珍しくも、フシ船中どよむばかりなり。ヤア阿濃の津の方より此船を目かけ押來る船。網釣の船ならずよく見よと大將御目を放し給はず。人々如何にと訝るうち近附くをよく見れば、浮網の御船印御座船に漕付け。使と思しく、舷に手を支へ。恐れながらも是より御注進申上げ候。君熊野御參詣お留守を親ひ。源の義朝衛門督信頼に與し。上皇の御所三條殿を焼拂ひ。帝諸共大内の黒戸に取つて押籠め。御大事只今と相見え候。急ぎ御上洛あるべしと宗盛公の仰ばかりにて、フシ皆々。色を失へり。清盛些とも動じ給はず。扱こそく我が思案源氏の黒星に當つたり。ヤイ廣盛何を驚く。これは豫て思ひ設けし事。義朝信頼が風情謀叛すべき體なれども。清盛都に在る内は頭を得上げず。時節を待つ

と見付けし故。我此度の熊野参りは彼等に旗を揚げさせん爲。動いて疑はしきを見るといふ兵法の大事此事なり。我が謀りに違はず謀叛人になり固まつたる。目出度し〜と勇み給ふ程猶心得ず。一刻も早く御上洛なされずば。帝の御上御一門の御身も心許なし。ヤアヤア船頭御船を阿濃の津へ戻せ〜と言はせも立てず。戻せとはどの船の事。斯程未然を鑑る清盛が。左程の用心脱るべきか。主上上皇の御片付軍の手配り。重盛が智謀を以てとつく沙汰し置いたれば。見よ〜三日を過ぎず太平の左右を聞くべし。いざ悦びの酒酌まん何にても珍しき肴もがなとの給ふ所に。不思議や風の吹くならで海の波浪をあけ。何とは知らず御座船へ、フシざんぶと躍り込むものあり。人々驚き取つて押へよ見れば。巨口細鱗の鱈なり急ぎ御前に

差上ぐる。清盛公ほやく笑顔。ハアア権現より好き者賜つたり。調味せよとの給へば性魔坊暫しと止め。熊野三所の権現は。伊弉册事解男速玉の命などと申せども。正しく本地は彌陀藥師觀世音にてまします。さればこそ御參詣も五戒を保ち。精進潔齋し給はずや。御口にる物の命を召され殺生戒を破り。御口に甘んぜられんは勿體なし。窺鳥懐に入る時は獵師も是を救すと言へり。急ぎ元の海へ放ち命を助け給はせ。権現の照覽却つて御身の守りとなるべし。愚僧賜つて放さんと。立寄る頭を扇にて丁々とからはし脱付け。汝古今の道理にも通じ。好き咄の伽と同船せしが。抜群の芋搦坊主よな。五戒はかいはいさ知らず。唐土周の武王兵を起し。孟津といふ河を渡る時白魚船に躍り入る。武王取つて調味させ。天地を祭つて是を食ひ。而して紂を討ち

周家八百年の基業を開く。是見よ魚の形。鱗鮪あるは源の義朝が鎧兜を着たるに似たり。色の白きは源氏の白旗清盛が船に入りしは。味方へ是を取つたる印。骨も鱗も腸も食盡し根を絶さで置くべきか。誰かある料理せよとの給ふ所へ。又追々の注進船大兵の征矢を射る如く一文字に押付け。是は重盛公より御注進の早船にて候。信頼義朝上皇主上を御所の黒戸に押籠め。恣に逆意を振ひ候處。院の別當惟方大納言經宗卿。兩御所を盗出し六波羅へ入らせ給ひ候。又重盛公は軍勢を引具し。御所を圍み給ひ信頼を生捕り。義朝は一方を切抜け東國の方へ落行き。殘黨悉く誅せられ都は太平に治り候。御心安く御宿願を果され。緩々御上浴あるべしとの御事なりと高らかに呼ばはれば。清盛ぞくく躍り上り。ヤア廣盛あれを聞いたか。惟方經宗の兩卿

には豫て謀し合せし故。兩御所を盗み出し思ひの儘に勝つたよ。勝つて兜の緒を緊むるといふ謬あり。熊野八住司は源氏譜代の者どもなれば。かくと聞かば野心を含む者もあるべし。汝は熊野に逗留し鈴木龜井が一黨。芋が瀬中津蕪坂の者どもまで心を付けよ。就中別當辨眞源の爲養に方人せし科。四年以前都へ呼上せ。詰腹切らせし時其妻懷胎と聞きし故。下司の平太諸賢に。平産の子男子ならば討つて棄てよと言付け置きしが。其後何の沙汰も聞かず。何にもせよ生置いて詮なき奴輩。此度母も娘も一緒に切つて了へ。何と性腹白魚の奇瑞今思ひ當りしか。ヤア廣盛。其坊主め此船に置くな。端舟に乗せ熊野浦へ追上げ心任せにぼつ拂へ。急げくと移し乗せさせ。そも今年改元の年號は平治元年。我も平氏秋津洲は早手に握つたり。悦び勇んで

船をやれ船仕れと呼傳へ。櫓拍子揃へて棹の唄。四海。浪風靜にて靡き。治る八島のえい／＼よほん／＼ほん／＼ほんほほほん外まで。日の本の恵みに。洩れぬ三へ名に高き。不思議を爰に。三熊野や音なしの里の其さき村に。枝は榮えし権現松。四百四病は扱置きぬ八百や萬の病をば。祈る驗のあるぞとは。四方に莖る下陰や。床几直して。寶物は。朝出鳥の土細工。女子賣人の是召せと参りの衆を呼懸けて。聲打添ふる。磯の波沖を見晴す氣の藥。針も按摩も打摩めて。ハズ只一筋の細道を。押すまい／＼。互ひちん／＼ちんばやお手打違へ腰痛め。杖をついてもとぼつくは。俄潰れの見ず聞かぬ。遠い聲も聞傳へ。参りを見ては是實はんせ。権現の使しめ。土で焼いても心は同じ。誓ひの數は幾つでも。上げねば願ひが叶ふべからず實はしやん

せ。かはい〜と賣る聲の。鳥實には似つからし。參詣の衆立止り。是は尤もな寶物。我も爰へも此方へもと思ひ思ひに買取りて。松が枝に打ちかけ〜。思ひなしか此腰が延びます。我等が足も立ちます。愈諸願成就と。伏拜み伏拜み我が家〜に歸りける。青松院性慶は奈地の浦より船を上り。三所の法施奉り故郷へ歸る濱傳ひ。參りの人に磯松。立寄り停みなう〜女中物問はう。

道行人に言問へば權現松とばかり教へしが。何故參詣のあるやらん國許への土産。仔細を語つて聞かせ給へと仰せける。扱は他國のお僧様よな。元來此松は伏拜みの松と申し。此所より三所權現へは道も隔たり。耕す農人釣する蟹の暇なき身は。折々の參詣も叶はねば。此處を三所權現の伏拜み。伏拜みの松と名付け折折の簪を奉りしが。誰が言ふとなく過

ぎつる頃より。此松に詣で諸病平癒を祈れば。忽ち本腹仕ると言傳へ日毎の參詣引きも切らず。參り合せ給ふも法の縁。拜んでお通りなされませ。ハアお茶上げう用意もなし。むさくとも此延の上。お疲れを〜はらさせ給へと愛敬ある。懇の物語り過分千萬。今一つ尋ねたき事あり。所の人ならば聞及びもあるべし。本宮の別當辨眞と申せし人。四年以前都にて切腹し相果てられし。其人の妻子の行方御存じなきか知らせてたべとありければ。女驚く顔色ながらハ思ひがけなきお僧様。夫は何故のお尋ねぞ。されば〜愚僧は書寫山の青松院性慶と申す者。沙彌の時辨眞とは心安く殊ない介抱に預り。其後播州へ參り四年以前の生害も傳へ聞き。飛立つく存せしかど。參ること心に任せず朝夕の廻向申すばかり。此度平の清盛と同船し當國へ參

りしも。權現の參詣二つには辨眞妻子の行方を尋ね。せめて昔の恩を報ぜん志。御存じならば教へてたべなう懐しき御物語り。則ち私は辨眞様の娘御柳の前と申すお方へ乳を上げ傳育てし。飛鳥と申す乳母候。親は坂上文藤次といふ浪人者。私の縁によつて。娘御お袋様諸共に。我が親の方に在しませ。七年以來の御大病。其病と申すは。辨眞様男子のなき事を悲しみ。權現へ立願なされ。夢中に長刀を賜ると見て御懐胎。十月満つれど御産も無く。一年ならず二年ならず。三年まで平産無し。其内に父君は御生害。御家督は没收せられ刺へ。懐胎の子が男子ならば殺害せよと。毎日々々郡代が入込み。平産を待てども〜又四年。今に御産のつけづきもなく。前後七年のお煩ひ。貧しき浪人の朝夕の助けにもと。仕馴れぬ業の此物實も。養君の

縁に引るゝ我が身の上。恥かしき物語り。
憐み給へ。シお僧様と不覺の。涙を浮べける。是はく好き人に尋ね逢ひ痛はしき話を承り落涙致し候よ。誠諺に憎まれ子世にはびこると。平家は日々繁昌し。源氏は日々衰ゆる。未だ聞かずや都には。左馬頭義朝謀叛を起し。待賢門の軍に打負け。義朝は東國へ落給ひ。公達附々の人々も。或は生捕れ殺害せられ。都は騒動眞最中と。聞きも取ずはつと驚き。なう申し夫は治定か一定か。イヤサ出家の偽り言ふべきか。清盛同道の船中にて追々の注進承る。と女は力を落し。若し其附々の人の中。吉岡鬼次郎幸胤といふ人は。如何なり給ひしぞ知ろし召し給はぬか。いや／＼と言ふ名字は聞及ばず。其鬼次郎は由縁の人か何故に問はるゝぞ。地さればとよ其人は。辨真様の娘御柳の前に許嫁。妾

が大事の養君の婿といひ。父文藤治と母方の叔父甥。重縁の誼に依り。吉岡鬼三太清悦とて。角前髪の小御。我親の許に介抱。兄鬼次郎は左馬頭義朝公に附隨ひ。此度の軍に生死の程。心許なや氣遣はしと。おろ／＼涙に暮れければホウ尤もく／＼さりながら。夫は爰から案じて濟まず。差當る難儀は辨真の後室。懐胎とも病とも分明ならぬ此年月。便々と捨置く事然るべからず。切つて了へと清盛の下知に依つて。播磨の大掾廣盛向ふと聞く。然れば只今の命も知れず。是氣遣ひの第一なり。地早く歸つて親に知らせ仕覺あるべし。但しかく言ふ事性度が口より聞きたりと。沙汰あつては兩舌の科。心ばかりの物語り構へて穩便々々の給へば。飛鳥立寄り賣物の。鴉を取つて石に打付け。一つならず二つ三つ打碎けば。こは何故と興醒め顔。いやとよお僧様のお情にて知らせ給ふ一大事。人に漏さぬ妾が誓ひ。熊野の牛王の裏に書く起請度毎お山にて。鳥が三羽死ぬるといふ。此鳥をかう碎けば。實の鳥も死ぬる道理。取も直さず直に是が牛王の誓紙。疑ひ霽した給へ。ホウ頓智の誓紙尤もく。馴染ある辨真の妻子見捨て難し。事難儀に及ば。力ともなるべきぞと。出家侍頼もしき。お志を伏拜みの。松は昔の友鳥。店取納め御供し我家を。指して三へ立歸る。昔なしの。里にし住めば便りなき。痛はしや別當辨真の北の方。長昔は本宮の上下にかしづかれ花を尋ね。月に賞でし身なれども。夫に離れし其後は。平家文藤次に養育せられ。本四年の月日身に重き。懐胎の子の祈り。亡き夫の爲。二つの願ひを一石に一字づつ書付くる。

ユエナ 妙法蓮華經机。今四十五字書きたればお經も願も成就の。足らずの石を拾はんと鬼次郎が弟。吉岡鬼三太柳の前諸共に。庭の小石を取々に、ナツリ拾ひ。淨むる

阿伽の水。流れと人の行末は、フシ知れぬぞ人の浮世なる。柳の前立寄りて。申し母様。鬼三太様の濱邊で拾うてお出でなされた石のやうに。美しうはなけれども。

是で御堪忍と紙に包みて差出せば。

47、能う拾うてたもつた。鬼三太様もいかにお世話。此法華經の文に。聚沙爲佛塔如是諸人等。皆已成佛道とお説きなされ。沙を聚め佛の塔を爲す。是の如き諸の人等皆。已に佛道を成すとあるなれば。お經を書く者の功德ばかりでない。

4石を拾うて下さる鬼三太様も。そもじも結構な功德ちやつたの。此御利生にて都へ上り給ひし。吉岡鬼次郎幸胤様義朝公へ宮仕へ好い身になり。そもじを迎ひ

に纏てお出でなされう。爰で祝言取結び。久し振にてざんざの聲聞こわいの。言へば娘はイエ〜。石を拾ひ拾ひも。此石にお書きなさるゝお經のお蔭。母様健康に身。二つにおなりなさるゝやうとこそ思ふたれ。祝言とは恥かしい。私が事は苦に病んで下さりますなとおとなしさ。母上わつと泣出し。親なればこそ子なればこそ。しをらしい事能う言やつた。世上の人の懐胎は一月二月延びるはあれど。七年が間え産まぬとは唐天竺にはある事か。是もない子を告子の神の咎か佛の罰か。よも人間ではあるまい。どんな者産まうかと案じらるる是一つ。殊に清盛の言付け厳しく。産落して男子なれば殺さるゝに極り。若し男子でもあらうかと。産まぬ先の苦しみより。産んでの後が案じらるゝ是二つ。

其爲に書くお經の力。産まずとも此儘で

死にたいわいのと泣き給へば。辨へある程子は悲しく。母の膝に俯伏して。共に。涙にくれにける。鬼三太はきがさ者。エ、氣の弱い。悔み言言はずと。究竟な男の子を天下晴れて産み給へ。清盛が下知で候殺さうなどとうせ

る奴。十人あらば十人百人あらば百人ながら鬼三太が受取り。指もさゝせる事ではないと聲高に。力を付ければ。文藤

次勝手より立出でこれ〜鬼三太。如何に若輩なればとて。壁に耳石の物言ふ世の中に。出る儘の過言禍を招くか。以來剛氣をふつつと止め。柳の枝に雪折はなしといふ事工夫せよ。いつもより飛鳥が戻り大分遅し。大儀ながら櫻現松へ迎ひに往ておくりやれ。頼み申す早う早うとありければ。甥は猶子のごとし

母方に連る叔父の命。通れ刀をばつ込ん

母君の傍近く。お袋様もお袋様。罰も祟りも道を背く人にこそ。神に依怙最厚。佛法に偽りあらば。代々の天子そもやそも。安穩に宮寺を建て置き給ふべきか。毎日書寫のお經の利益。何事も思ふ儘と何故信心を堅め給はぬ。法華經一部八卷二十八品。六萬九千三百八十四字を。今四十五字にて成就とや目出度し目出度し。心清淨に愁を拂ひ。一字も早く大願を滿て給へ。佛殿同じやうに泣くまい墨でもお磨りなされ。扱々々。心弱しと諫むれば。ア、言やればさうぢや。此悔みも自らが。信心の未決定なる故ならん。椰よ墨磨れ。いでさらば。御經書寫したはんと。又經机に打ち傾き。書付く石の數々や。濱の眞砂は讀み盡くし。つくすとも盡きぬ。歎きの身の程を。し思ひ遣るさへ痛はし。地所の郡代下司の平太諸貴案内もなくつゝと

入り。ア文藤次。今日も病人改め。龍通ると奥に入り。こりや石に何のてんごう書くと机はぬ退け母君の。杵かい掴んでぐくぐくと懐を引明け。押して見つ掴んで見つ。合點のいかぬどん腹と突轉し座に着けば。親子はとかうの詞さへ泣くより外の事ぞなき。文藤次無念の心を鎮め。ア、毎日々の御改め御苦勞千萬とあしらへば。こりや何時まで足を運ばせる。佛の面も三年四年此女めに飽果てたり。今も腹を掴んで見るに。左の方に一塊。病であるまい。極つて男子の懐胎。便々と産むまで待たれまい。分別せいで文藤次とッ苦り。切つていひければ。ハア是は存じ寄らざる仰せ。毎日々々同じ事申すに似たれども。正し應聲虫と申す病にて。時々腹の内からおうくんと申す。幾度仰せられても。病にまがひ御座なしと。言はせも立てず

言ふなく。應聲虫の煩ひ。物識にとつくと尋ねたれば。應聲虫とは聲に應ずる虫と書く。唐土淮西といふ所の。揚綱といふ者此病をやむ。外にて物を言へば。其詞を腹の内から言ふ。鸚鵡の鳥の人の詞を言ふに同じ。或醫者本草を開いて。一つく薬の名を言立つる。悉く腹の内より口うつせしが。雷丸といふ藥の名を言ふに答へず。扱は雷丸を嫌ふと心得。是を用ひて平癒しまりと文昌雜錄といふ書にあり。此女が病應聲虫に極らば。外にて言ふ事を口うつすべし。前に實否を正して見せんと立上り。歎き伏したる母君を情なく。我が傍に取つて引付け。ア腹の内病よ。應聲虫か。應聲虫かやいと。言うては耳を傾け文藤次。何とも言はぬぞよ。但し是はむつかしさに言はぬか。いろはにほへど。言はぬぞよ。ちりぬるをわか。言はぬぞ

よく。なんと。聲に應ぜいでも應聲虫を誰とか思ふ。播磨の大掾廣盛といふ者。主君清盛公熊野權現へ御社參の序。辨真が後家の病氣。應聲虫といふ病とも。懐胎とも今に分明ならぬ由。何れにしても生け置きて。詮なき源氏のがらくたども。討つて來れと御誕に依つて向うたり。後家娘共に此方へ渡せやつと呼はつたり。文藤次刀搦込みつと出で。はイヤくさうは言はれまい。辨真源氏に方人せし科は四年以前腹切つて相濟み女には構ひなし。懐胎の子男子ならば切寄せよと先達下知せられし。今又女も殺せよと聞定め。重ねてお出でなされ廣盛様と。取合はぬ所へ鬼三太清悦息を切つて戻り。下司の平太を引摺んで三間取つて投げ。叔父御出來た渡さぬ渡さぬ。清盛はおろか天輪王の勅命で逃げて遁れける。立歸るは鬼三太に道で違ひし乳母の飛鳥青松院を御供し此有

よく。なんと。聲に應ぜいでも應聲虫か。懐胎に極つたわやい。妙な事御意なさる。懐胎と申すは十月を限り。一月二月延びるもあれど。假初ながら是は七年。懐胎でござらぬ。言ふな。夫も聞いて置いた。唐土の老子といふ聖人は。八十年母の腹に居て。白髮になつて生れたわやい。七年が十年も居まいものか。よし。汝と論は無益清盛公熊野御參。此所に御座なさるれば申上げ。是非は御説を受けての事。又來るまでを大事にせよと。睨み散らして歸りける。母君胸騒ぎなう文藤次聞きやつたか。清盛が來て居るといふ。されば。いつにない事郡代が。理窟張つて歸りしも夫故と覺えたり。如何様に言上げ如何下知せんも測られず。鬼三太乳母も歸り次第一思案と言ふ所へ。下司の平太大勢誘ひ取つて返し。中にも廣盛大音上げ。我も。ならば手柄に取つて見よと踏んば

様を見も分かず。ヤアお袋様。父様。地二
人ながら誰が切つたと。狂氣の如く見え
ければ。地コレ乳母様を廣盛が手に懸
けし。地悲しやなうと柵の前ニテ縛り着
いて。泣き給へば。性慶御涙にくれなが
ら。地女中手負を介抱あれ。地痛はしき
母御の最期やと。立寄り御覽じあら心得
ず。地死骸の呼吸は切れながら。動くは
如何にとの給ふ内。地疵の口を誕生門母
の血汐に身を染めて。赤きが上の赤子の
像。大きさは八つ九つの子の如く。産髪
垂れて目をばつちり。出るより早く駈歩
く。理なるかな成人して。西塔の武藏坊
辨慶と。世に名も高き此赤子。地不思議
なりける誕生なり。地人々大きに驚けば
文藤次感歎し。地扱は母君の法華經書寫
の御功德。子は些とも疵付かず生れし
な。只今娘に承る。御僧は性慶御坊と
や。七年胎内に在りし此子なれば。かく

あらいで叶はぬ筈。地母君は御最期愚老
は深手。此所の養育叶ひ難し。地あはれ
御山に影を隠し弟子となし。育て養ひ下
されば。生々世々の高恩と餘儀なく。地
頼み奉る。地尤もく至極せり。我此所
へ来る事。辨眞の恩を報はん爲。地如才
に存ぜずさりながら出家の身。産養ひも
心に任せず。如何と思案し給へば文藤
次。地誰彼と申さんより。幸ひ柵様に含
めし乳の残り。我娘を添へ申さん。地
ヲそれこそ究竟一。此上は片時も早く立
忍ぶに如くはなしと。赤子の側に立寄つ
て御袈裟を打覆ひ。搔抱きて出給へば飛
鳥はあの子の守りぞと夢想に得たる長刀
の。箱脇挟み目は涙。柵様さらば。乳母
さらば。やがて便りと其跡は涙に聲も。
音なしのオウ里をへ別れて出でて行く。

地サア此跡は柵様一人。泣くまいく手
を負うても此爺が。憂目は見えぬといさ
むる所へ鬼三太は。下司の平太が首提げ
立歸り。地エ、無念千萬。地廣盛めを見失
ひしと見廻しく。地ヤア。叔父は手を
負ひ給ひしか。お袋様は最期か。是は。
是はと。地餘りの事に涙も出でず。地狼狽
へ騒ぐぞ道理なる。地驚きは尤も。汝追
駈け出でたる其跡へ。廣盛一人取つて返
し此仕合。悔んで返らず。扱言付くる事
あり。死骸の口より誕生の男子は。書寫
山の性慶といふ御僧に預け。飛鳥を添へ
て落したり汝は此柵の前を同道し。鬼次
郎に手渡しせよ。地いとほしやお袋が臨
終まで。祝言させて疾く見たやと。若に
病まれし大事の兄嬢。伴れてサア行け。
はや行けとありければ。地成程々々同道
は致すべきが。叔父御は何となさる。地
ホ、言ふにや及ぶ跡に残り。追駈くる
敵あらば防いで討死するばかり。地いや
いや然らば御免あれ。幼少にて父に離れ

此年まで御介抱。親に劣らぬ叔父の御恩。蒼海淺く須彌山低し。殊に深手の臨終を見捨て。我々ばかり落ちん事存じも寄らず。一緒に御供申さんと聞きも敢ず臂を張つてぐつと腕付け。手負の老人足弱の女を伴れ。追手懸らば何とす。雑兵の手に懸けさせ。名を埋め耻晒せか。我を庇はゞ腹切らうかと差添に手を懸くる。ア、捨て置いて参ります。確と行くか。腹切らうか。叔父甥の縁切らうかと。せり懸けられ。エ、暇乞さへそこゝに。多年の高恩臨終の名残跡に。見捨てゝ行方も。知らぬ山路を忍びける。かくと聞きてや清盛公廣盛が案内にて。大勢引具しどつと駈寄せ。ヤアヤア文藤次といふは汝よな。碌々たる下郎めに。手を下す筈はなけれども。平家に背く奴輩はかくの通りと。八庄司の者どもに聞怯させん爲來つたり。シヤ冥加知

らぬ悪人めと飛かゝり。肩先擲んでどうど打付ける。ヤア棘掻き程なりとも。血を見て死なうかと。起上る所を息の根をしつがと踏付け。一捻捻ちて白髮首えい。やつと引抜き捨て。ヲ、心地好し廣盛。義朝は話腹切る。悴どもは都へ上り。心の儘に成敗せん。此後源氏の末業とて面を差出す覚えなし。浦々。鳥々に隠れ住む與黨の爲。權威を振ひ嚇しをくれよ。弱みを見するな後れを取るな。日本六十六ヶ國。江河の鱗山野の獸空飛ぶ鳥に至るまで。今日よりは皆清盛が羽翼の下。四海一統平家の世と踏固めふ。み。轟かし響き渡れる山彦や。草木も靡く赤旗の風を起して上浴ある。國土の悪鬼天の邪鬼。六欲天の四魔天魔。阿修羅の。荒れたる勢もかくやと。恐れぬ方もなし

第二 道行故郷の順禮歌

たど頼めハッシしめちが原のさしも草さしも長き御誓ひ。枯れたる木にも花ぞ咲くまして若木の男松。エエテ連る枝のみどり兒に。なかははめぐりあはざらん。ッソそれを力に二人連。肩にかけたる笈摺も。親のなき身はだてもなく。昔の袖を拂の前。今はお京と名も變へて。田舎めかざるッソ島田福ハッソ都のつとは。水鳥の陸に迷へる兄思ひ。故主に何時か鬼三太が氣散じならぬ氣披ひ。長崎心遣ひを休めんと兄嬢振らぬ嗜みや浮世の水に溺れねば。手を執るまじき戒も。法の道連許しある。ッソオリ順禮へ修行の。ッソ徳とかや。重層一番に紀の國。那智山。岸打つ。浪とナホスソ歌ひけるハルッソ。我が古里の。御山を爰に移して昔より。オオソリ立つとも。知らぬ今熊野札打ち。そめてッソ

清水に。團圓結ぶ心は。涼し。かるらん。
重くとも。五つの罪は通るべき六波羅密
寺六角堂。ナホスはや革堂に九重の町を。

舟を離れて。野をも過ぎ。團圓山路に。向

ふ善峯をナホス越えて丹波に。栗の道旅の
疲れを團圓あな憂やと思はで。急げ我も
げに。ナホスハルフシ 夫戀ふ鹿の。津の國や此
御寺に來て見れば。心の塵も打拂ひ。扱
も奇麗な總持寺と。行く道すがらうさは
らしまぬ松の林の群鴉があい。くくの聲
聞けば。熊野の山の夕月夜。父母の事思
ひ出す。野邊に飛交ふ蝶の翅に。和歌
吹上の娘髪結うて貰ひし乳母が事。今
にくしく思ひ出すそれよ。それく
其時は。まだ振袖のフシうら若み。
我も柳の前髪姿。何時の間にやら。生
男の。戀もなき身と。暮し。こしフシ月
さへ日さへ。十三年夢か現か現か夢か。
知らぬ人目の悪口に。扱も好い中好い女

夫あやかりものと指さされ。耻かしいや
ら可笑しいやらで。辛氣氣の毒。ア、フシま
まよ。耳吹く風の在郷馬。戻り安うて乗
せうと言へど。法の爲には勝尾寺。箕尾

の辨天伏拜み。十五とうじを愛し給ふ此
御恵みぞ頼もしき猶も幼き弟が。身の行
末を祈りなん。土産と言はどよいそりや。
ン。此子がや。金等でやトキケンく。
えいずんどえ。歌うて聞かし
しやみせでツツツツトン。是も小唄
よえいそりや。えいずんどえ。是も小唄
の中山寺や。西の宮兵庫に積く
道。越えて其方に。照す
須磨明石。かの石山の紫や。硯に。照す
月は一つ。影は二つ。三つが一つの望の
空。我も源氏に由縁ある。其名つゝま
し同じ。名の。爰に清水播磨濁。あまね
きかどに。品々の。春は花。夏は橘秋は菊
冬は雪見の。曾根の松枝も。杖つく旅

姿。書寫の御寺も程近き。道と思へば急
がれて。暮行く空も厭ひなく目當に迎る
里の名は。女の身にし縁も好き姫路の。
町へと三

へ行く水の。流れと人の。行末は。
定めなき世と。いひなが暫し心を播磨
湯。福井の宿の野端に世を離家の井の字
窓。立つる煙も絶えぬ。に月日を送る老
女あり。そも此老女の古へは熊野の別當
辨眞の獨姫。椰の前を育てたる飛鳥とい
ひし身なれども。今は浮世におちの人。
昔にも似ぬ姥櫻。いとど老木の身の
上にさいつ頃より中風の。病も重き桑の
杖縫りよろほ片手業。起居も自由なる
ねども自在の鎌子友として。かや茶の端
香高砂や。尾上の鐘も身一つの。フシ頭の
霜に沓えぬらん。星さへ見えぬ旅の空夜道とぼく
鬼三太が。お京に力つく杖の節もしどろ

の順禮歌。足より心草臥れて。なう申しお京女郎。會根から姫路へは僅た二里半。一息にやつてくりよと思ひの外の砂道。扱退屈や煙草の喫みたさ。幸ひの此離家火を一つ所望なされと。指圖にお京が戸口に寄り。行暮したる順禮ども御報謝と思召し。煙草一服吸付けさして下さりませ。御無心ながらと言入る。老女は耳を敲て、いとしばや姫御前の。夜道をかけし修業の旅。煙草の火とはお易い御用。軒下の唧へ煙管は政道正しき所の法度。此方へ這入つて参れやと圍爐裡の傍に居ながらも。竹に括りし戸の明立。きつしくならぬ挨拶に。それはまあく嬉しやと言ふ物腰も聞いた聲。

主人の顔も見たやうなど互に忘れぬ覚えの目角。其方は乳母ではないかいの。さう仰しやるのは柳の前様。我等は鬼三太見知つてか。ほんにさうちや是はマア

夢ではないかと悦びて。扱もく有難や是といふも佛のお蔭。お果てなされた母御様のお引合せと思ふにぞ。昔のゆかしさよ。熊野でお別れ申したは昨日や今日の日やうなりしが。月日の立つにはようがなく此まお脊の延びた事。ヲ、よい所體やのいとしらしい女房振。お袋様の譲りの笑鬘髮際なら目元なら。全然に瓜を二つ。鬼三太様も老くろしう變れば變るお顔の變れ。心に御苦勞遊ばす故と思ひやられておいとし

残りあらんものと。柳の前を知邊に預け。年を重ね尋ねしが。見しと言ふ人もなれば關東へと志し。東山道北陸道尋ね廻つて伊豆の國。蛭か小島に在しま

す頼朝公にも對面し。坂東八ヶ國搜し求めて逢はざれば。爲方盡きて都に歸り。謀し合せて西國巡禮。思はず其方に邂逅ひしは。兄鬼次郎にも尋ね逢はん。吉左右なりと語るにぞ。鬼三太様の仰せの通り熊野を出でし其日より。いかいお世話に預りて知邊の人に介抱せられ。名をもお京と改めて身の上隠す渡り奉公。彼所の御所この屋敷。半季一季と勤める内にも。心に忘れぬ鬼次郎様。又懐しう戀しきは。産れし儘にて別れたる。孤の弟を預け別れし其方の行方。磨の書寫の御寺に在りとばかりはほの聞いて。世の便もせざりしは。世を忍ぶ身の淺ましき。心で思ふばかりにてあだに暮せし十三年。鬼次郎様に逢ふまではせて女の操ぞと。顔も直さず齒も染めず。心の底には振袖着て。待つに効なき殿御の行方。餘り心の遣る方なき。殊

す頼朝公にも對面し。坂東八ヶ國搜し求めて逢はざれば。爲方盡きて都に歸り。謀し合せて西國巡禮。思はず其方に邂逅ひしは。兄鬼次郎にも尋ね逢はん。吉左右なりと語るにぞ。鬼三太様の仰せの通り熊野を出でし其日より。いかいお世話に預りて知邊の人に介抱せられ。名をもお京と改めて身の上隠す渡り奉公。彼所の御所この屋敷。半季一季と勤める内にも。心に忘れぬ鬼次郎様。又懐しう戀しきは。産れし儘にて別れたる。孤の弟を預け別れし其方の行方。磨の書寫の御寺に在りとばかりはほの聞いて。世の便もせざりしは。世を忍ぶ身の淺ましき。心で思ふばかりにてあだに暮せし十三年。鬼次郎様に逢ふまではせて女の操ぞと。顔も直さず齒も染めず。心の底には振袖着て。待つに効なき殿御の行方。餘り心の遣る方なき。殊

に今年こゝとしは母様の當る年忌も弔ひたく。鬼三太様をお頼み申し尋ね下りしかひあつて。年頃ゆかしい其方の顔。見る嬉しさは嬉しいが昔に變る姿形すがたがた。元の姿は何處へやら是も何故我々が。拙い運に成果てて苦勞を懸けし故ぞかし。何事もく敵してたもやとッばかりにて跡は。涙となりけり。なう勿體ない事ばかり。何しに左様に思ふべきさりながら。人の身の心の辛苦しんくは悲しいものと。枕許まくらごなる箱取出し。是は定めて覺えてござらう。小銀冶が作の御長刀。産れたお子の身に添へて。熊野の山を逃退にげのりきしが。名を鬼若と付け申し。書寫の御寺に預け置き性慶阿闍利の御弟子となし。出家相續けつぞうましまさば沙門の身の表道具おもてぶくろ。此長刀を渡さんと思ふに遠とほふ學問嫌まじひ。明け暮れても悪あがき。腕白者と憎まれ

るしるしにやめきく。年も寄り。五い十じゅうそこの身なれども何時の間にやら此白髮しろげ。凌雲りやううんの額を書き。暫時の内に白髮はくはつとなりし例も身に知られ。我身わがみながらも疎そまじき此頭こゝろ。剃りこぼつて尼ともなり。衣ころもを墨すみにと思ひしが。養やう君きみの許嫁よめかけ御祝言も濟なまぬ内。髪を剃し世を捨つるはお主へ對して忌いはしく。先をからすが氣に懸りッ惜あはれぬ。白髮の惜あはれられて。五節句ごせきぐ又は月々のお朔日十五日。祝儀を祝いわふ櫛くし梳とり老の化粧けいざうの凄じと。笑はゞ笑へ身の祈禱いのり。鏡に向ひて姫君の御出世願ふ其内にも。只苦になるは鬼若様。殊ことに妾が身の上まで。寺から里の御育おやしなみ。氣きの毒どくや疎そましやと思ふが積りて此中風こちゆうふう。積たつれなき命と恨うらみにし存へて居たればこそ。お二人様のお目にも懸り。積り積りし憂うれさ辛あつさ語り明かす身の本望ほんぼう。天道様のお蔭かげぞと。嬉し涙に年月の。思ひ涙

も取とり置ませて。一つに洗せんすら爐裡の内いろり。柴の濕りて消えぬべし。鬼三太お京も鬼若が噂うわさを呆あれ居たりしが。最前さいぜんより話わに紛まれ何の氣も付かざりし。中風ちゆうふうとは氣の毒千萬さりながら。養やう生せい次第だい全快もあるものぞと力を付け。イヤなうお乳母おちち。今宵こんやは爰こゝに一宿いっしやくし。明日あすは早々書寫しやうしやうに登り。鬼若にも對面せんが先づお京様もひもじかる。我等もどうやら腹が跡へ寄つて來た。ワ、お道理く。先刻さつこにから頼たのみと心が付かなんだが。うたてや今夜に限つてなう。ム、ウ米が無いと見たの。夫おとこならば更さらげぬ内福井の宿へ一走り。餅もちなりと買かうて來こう其内そのうちにお京様は。マアとろくとお休み。序しりに酒さけも買かうて來こうとそこら尋ねて提ひげて出る二合半入にがはひのとつくりとッ跡あとしめさしやれと出でて行く。老女はお京に氣を付けて障子の彼方あつちに枕まくらもあり。洗濯蒲團せんたくぼたんも

彼處にと様々心付くるにぞ。氣世話かけ
るも疎ましやそんなら暫く氣休めと反古
張なる一間の奥より長のへ疲れやはらす
らん。播磨の國の街道を己が家居と巢
を張りて。世渡る業の振舞はいとも危き
雲助と。下り果てたる身ながらも腰に放
さぬ一本刀。仲間外れの働きは。誰白波
の夜の道。向ふの土手の片陰よりのさ
のさ上る二人連。跡先に立ちはたかり。
■ヤイこゝな新米め。數年こちとが仕に
せて置いた。此街道の夜働き。うぬがふ
つとらせてから上つたりやのかんく
坊。好い所で出くわした。しこ溜がある
べい。■五六百置いて、往けと、かさから
懸ける一強請。■イヤ旨い事をほざく奴
等。うぬが様な骨張さへ働きのない時
節。五六百とはえらい事。こころりづつ
はこましてくれうとすつと寄つて引擦
き。これこりり受取つたか。うぬにもく

れん是こりりと。道端へ投付くればこり
や如何ちや。手酷いこりり是がほんの簡
こかし。光棍めに間違うたと咳きく逃
げて行く。■エ、埒もない奴等に骨折
ひだるい上の腹減し。イヤ幸ひの小屋の
内。■糞でも麥飯でも引擡へてこまさう
と。門口蹴放しすつと入る。老女はうた
た目を覺し案内もなく誰ぞいの。■イヤ
苦しいない盗人だが。先づ急にひだる
い。飯があらば出して食はしや。ム、ウ
誰ぞと思うたりやお盜様か。飯の事は
扱措き。米が一粒もないわいの。そんな
ら酒は。けもない事。それ其處な鑓子に
茶が沸いてあるばかり。■飲みたか汲ん
で飲んだが可いと寐ながら、答へる氣
の丈夫。■ム、ウ恰好より落付いた老若。
外から見たと違うてにつとりとした内の
さま。■得てこんな所に隣銀が溜つて
あるもの。かう這入るからは覺悟して。

有りたけこたけ出しやれく。■ハ、ハ、
ハ、悪い目利。此様な野離れに獨住の此
婆。何金銀が有るもので。見えた通りの
此家内。欲しい物があるなら勝手次第に
取つて往にや。■幸ひ今夜は志のお逮夜。
■報謝したと思はうまで。■ヲ、好い合點
■家捜しすると、■うそく、捜す枕許。以前
の箱を見付出しこりや何ちや。■扱こそ
扱こそしつかりと重たいは。■隣銀に極
つたと引抱へて出でんとする。■裾引執へ
てア、これく。■それは大事の預り物。
外の物は何なりと欲しい物取つて行き
や。いや其大事の物が此方に欲しい。■
■エ、面倒なと裾振放せば又取付くも片手
業。■曳摺られても放さぬ腕振切れてはば
つと倒け。又起上つてしがみ付く機みに
箱を取落す。拍子に倒ける角行燈燈火消
えて眞の間。お京はふつと驚く寐耳。勝
手は覺えぬ暗紛れ。迂濶に聲も立てかね

て、怖さも増る探り足。地かくとも知らぬ鬼三太は火繩片手に餅と酒。調へ歸る薬屋の内物騒がしきに心を付け。透し見れば必定盜賊。イヤ、まつかせと尻引、寒げ。刀の下緒引解きたぐるも時の捕手繩。つたひ寄りくこりや。捕つたわと掴んで投げるを飛遠へ。すつくと立てば又立寄る胸をもぢりに打ちかへされ。蜻蛉返りの身を直に沈んでかづく餘りの受身。心得たりと横に飛ぶ。爪先取つてやまから投げ。飛來る身をかはし行く身はづす。暗がり紛れの掴み合ひ。互の鬘を力草、暫く息をつぐ内に。物に馴れたるお京が氣轉心附木に圍爐裡の柴。ぱつと燃せる篝の光に。雙方見合す顔と顔。ヤア、此方は兄貴でないか。ヤア、其方は弟。鬼次郎様か。鬼三太か。ヤア、なんと鬼次郎様ぢや。これはくこれはこれはとお京も老女も兄弟も。嬉しい有り

呆れ入り、暫し詞もなかりしが。鬼三太胸を押鎮め。假初に別れしより十ヶ年に餘る此年月。何處に忍び在せしや。今月今夜不慮の對面。兄弟の縁といひ殊に盡きせぬ妹背の結び。許嫁ある柳の前よも見忘れはなさるまじ。是なるは乳母の飛鳥。かたぐいを手渡し致す身の大慶。是に過ぎじと、相述べれば。兄を思ふ親切祝着々々。扱も某待賢門の夜戦に。身を討死と極めし所。義朝公の御説には。佐々木源三、源五、某三人心を合せ。都にまします公達を守立てよとの御頼み。其人數に加へられし。武士の本望有難く隠れ忍びて折を待ち。鞍馬山にまします牛若君に對面申し。西國表の源家の浪人。語らはん其爲に盜賊と姿を變へ。野山を家としさまよひ暮せば間違ひしは理。かく邂逅ふ此上は柳の前も夫婦になり。時節を頼む平家を亡し。

男辨眞の仇をも報はん。御邊は是より都に歸り。我々が、大兄鬼一法眼。今平家の祿を受け歡樂に暮す由。弟ながらも其方は面體知られぬ一つの幸ひ。何卒彼に近寄りて心を探り。計略の奉公か、但しは。利慾に源氏を捨て。眞實平家に仕へるか。善惡次第に兄とは言はせず討つて捨てよ。某は又御身に代り願禮となり。丹後路より密に都へ登るべし。牛若君にも逢奉り件の次第を申上げよ。必ず必ず兄ながら鬼一法眼は烏潛の者。心をゆるす事勿れと僅た今逢ふ弟に。弛みを見せぬ忠義の指圖。誠に兄は兄程なり。鬼三太大きに悦びて仰に任せ某は。是より直に立歸らんこれなう老女。幸ひと餅も酒も買うて來た。祝ひの雜煮献々の盃事。萬事は好きに頼む。最早明けに間もなければお暇申すおさらばと。笠摺脱棄て兄親に頼む此身の谷波や。互

の土産は無事な顔。待ち申すぞと立ち出づる跡はお京と鬼次郎が。深き妹脊の盃に。積る心の物語。老女が白髪雪の松盡きぬ。契りや三層へたえしなき。碓の海に法の船深きに至る筆の跡。書寫のお山と申せしは。播州一の靈場にて。墓並ぶる寺院の數。中にも青松院性慶阿闍梨當山の一庵にて。人の敬ひ重々しく貴き寺は門からや。庭の盛砂筈日も清淨の地を顯せり。地今日は殊更賑々しく庫裡客殿の拭き掃除。墓子仕懸ける花生ける心も花のお稚兒達。一つ所に寄集り。なう申し梅千代様竹丸様今日入學は此國の領主。播磨の大掾廣盛様の御息。岩千代様と申すお方都に育つて學問の下地も餘程あると聞けば。手習ひ物讀み經陀羅尼追抜かぬが兄弟子の嗜み。地夫につけても笑止なはあの鬼若。身體ばつかり大きくて手習學問は精に入れず。力持の捧捻

のと稚兒の行儀は一つもない。阿房羅刹の鬼若ちやとオッ笑ひ講るに程も無く。廣盛が一子岩千代丸今日入學の年配より。大人くろしくすねこびて父が譲りの憎てす。顔もしかまの徒士若黨附添ふ中にも市原團平。身を高ぶりののさばり聲。やあく〜稚兒達案内頼まう。大掾の子息岩千代様御供申し参りしと。言ふ聲に性慶阿闍梨客殿に立出給ひ。好くぞ〜岩千代丸今日の入學。神妙に存するさあく〜是へと手を執りて。もてなしあればすつと通り。實にお師匠は針の如し。弟子は糸の如しと申せば。今よりは國の守の悴とも思召さず。遠慮なしに御教訓。頼上ぐるといき過ぎて。可愛氣もなき詞の品それよ是よと稚兒達も。互の挨拶事終れば。祝儀をいはふ持たせの樽。折櫃こもの取々に。地はや盃を師弟の結び市原團平座席を見廻し。豫て當院

の稚兒達は大勢と聞きつるに。はや是ばかりに候か。成程貴方の仰せの通り多くの弟子に候へども。其身の器用次第にて得度致させ出家となせば。只今では三四人誠にそれよ。竹丸梅千代何故に鬼若は座敷へ出ぬ。鬼若々々と呼び給ふ師の坊の御聲に。あいと返事のあどなくて姿は實にも鬼若丸。遺戸押明けのさ〜と疊觸りも足音も。あら木造りの仁王の片方。突据多たるが如くなり。團平鬼若に打向ひ。いやなうお稚兒。是に居らるは身が主人。此播磨の國の守大掾様の御一子岩千代丸。今よりは學問の朋友。隨分仲好くせられよ。若旦那其盃此稚兒に御差しと指圖に任せ持ちたる土器。鬼若が前に差出せば。此様な小さい物が飲む事はおりや嫌ひ。おれが好きは是が好きと彼處に並べた樽提げ。かゝみ打抜きがぶ〜。ア、好い氣味や

と舌打し何面倒な此盃。其方へ戻すと投
付ける土器よりも座敷の興。シ微塵粉灰
となりけり。地師の御坊座興に取做し。
御馳走のお持たせ客ぶり思ふ鬼若。土
器を碎きしも心を碎いて學問を。勸み給
へと言ふ事ならぬ。いざ入學の讀書始
め我が寺の作法にて。浅きより深きを知
る心を示す實語教。サア一句づつ鬼若か
ら讀んで廻せと師匠の命。アノノ、いや
まあ竹様梅様。二人の衆から始めまつし
やれ。地然らば是から讀みます。山高
きが故に貴からず。樹有るを以て貴しと
す。人肥えたるが故に貴からず。サア鬼若
様。ムウおれかの。アノノ、それく、肥
えたるが故に土佛といふ。いやさうでは
なかつた今のはぢやらぢや。ほんくの
はアレ何とやら。おつと思ひ出したぞ。
智有るを以て貴し。ヲ、出来た。其
次は。其次言うて廻さう。地富は是

百貫二が九十貫八十貫と。取つても付か
ぬ間に合口流石童の岩千代丸。耐へか
ねて打笑へば。地たつた今うせた新べの
弟子め。兄弟子が物讀み忘れたが可笑い
か。笑ふ面を泣面にし變へてくれうとつ
つと寄り。此鬼若が握拳。餓鬼めが頭を
播磨の大掾。國の守何とも思はぬ兄弟子
の威勢を見て置けと。言つてはこつとり
又こつとり。是はと留むる稚兒達も、
持餘したる力強。地團平見かね腕捻上げ。
地ヤアこいなあばれ奴。ム、ウ喰ひ付け
ぬ酒に酔うたな仕返しは三層倍。うぬは
主人をかう打つたか。地いやかう打つた
と剣返し烟框を續け打ち。握拳の相伴
に。旨いものかと嘲笑。地性度阿團梨二
形は大きい生れてもまだ年は十三歳。頑
是なき慮外の段屹度折檻加へ申さう。地
先づくあれへ御出であつて庭木の花を

眺め給へ。心の怒りを鎮むるが則ち法の
入學ぞと。示しの詞に隨ひて。皆々打
連れ奥に入る。地廻り逢ふ。地妹背の道
も菩提の種。主従三世の縁深き誠を今ぞ
白髮の乳母。鬼次郎夫婦が介抱にて法の
道連順禮歌。お京が肩に笈担の親と頼み
し。身のいたはり。地寺の御内に案内して
御出家衆頼上げましよ。福井の乳母が參
りしと鬼若様に仰しやつてと。言ふを聞
付け乳母おちやつたか好うおちやつた。
爰へくと招くにぞ。地オ、ウ嬉しやそ
れに御座るか。コレ和子爰へ御座れ。お
前に逢す人がある。なうお二人様此お子
がおお叫し申した鬼若様と。地語る内より
姉のお京年月積る懐しさ。母の形見と思
ふにぞ涙はらく先立ちて。地言ふべ
き詞も辨へず。地鬼若は不審顔此女中は
何處のお人。何の爲に泣かしやるぞ。ど
うやら俺も泣きたいやうで。地悪いく

と差俯さしうつ向く。ヲ、泣きたいは道理よの。

何ばわやくな心にも自然と知らるゝ親身しんみの血筋。常々此方に語つて置いた姉様でござるわいの。ヤア、是が姉様が能う今迄に便りせず。憎いお人と思うたが今逢うて顔見れば、フシいとしうござると悦ぶにぞ。世に持つべきは兄弟ぞや。他人が何とて其様な優しい詞聞かさうぞ。國の亂れに世を忍び弟ありと知りながら。

逢はで暮せし十三年母様の命日に。兄弟對面する事も偏に佛の御利生。南無觀世音菩薩とフシ唱ふるも亦涙なり。鬼次郎鬼若に打向ひ。我は其方の姉婿にて外ならぬ一門。是なる乳母が語るを聞けば。學問手習を疎略にし。悪あがきに心を寄せ師の御坊の教訓も。乳母が意見も用ひぬ由。不届散々の行跡今までとは違ひ。某があるからは言ふ事聞かぬのら者は。手に懸けて討つて捨つるぞ。是は近

頃迷惑。悪あがきした覺えもなし。學問

も手習もと言ふを打消す乳母の老女。これ／＼まさ／＼しい其體は何ぞ。今年は母御の十三年則ち今日が御命日。此方の爲には誕生日。彼や是やを幸ひにお剃りして出家となし。自らも此白髮頭共に固めて法の友と。思ひし心を無下にして學問厭がり手習嫌ひ。日本一の不器用者と阿闍梨様の物語。聞く度毎に此婆が

此病。六つ七つの子供でさへ物も書けば物も讀む。こなたの年は十三なれどお袋様のお腹にて七年の春秋を重ねて生れし鬼若様。節分の祝ひの豆數ふれば十九歳。年に似合はぬ不器用は誰に似た因果ぞや。經陀羅尼は愚の沙汰いろはにほへとも讀覺えず。紙費しの手習に鳥の足形釘の折。のたくり廻る蚯蚓にも劣りたる生れ付き。草の葉を食む虫だにも文字

の形を残すぞや。木々に囀る鳥だにもほ

う法華經と唱ふるが此方の耳には入らぬか。ヌアエ、淺ましきよと辱しむる。ツエ言ふまいと思へども始めて逢うた二人の家。侮蔑が耻かさに誠の心明して聞かす。如何なる過去の因縁やら兎角出家になりとむなく。所詮學問手習に不器用者といはれなば。出家にはよもせじと覺えた事も覺えぬふり。知つたる事も

知らぬ顔と詞も引かぬにまだぬけ／＼と其抜口。學問も手習も不精な證據を見せるぞやと。懐中の守より一卷を取り出し。サア此お經は何のお經ぞ。ヲ、普門品第二十五。觀音經ではあらざるや。そんなに見事此お經を讀む事が成りますか。ホ、……そんな事は胡ぼ／＼。望みなら讀んで聞かさう。即從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音菩薩。ア、これ／＼もう可ござる。常々耳に聞觸れ

て口眞似の空覓え。お経はいかろが此書付は讀めまいと。菅笠取つて差出せば。迷故三界城悟故十方空。サア其心は何とく。ホ、迷ふが故に三界悟りの心開くれば。十方共に空ならずやもとより西も東も一たい。南北いづくにあらざらんと衆生に示す觀音力。頭に戴く此笠の深き心は福業海。無量の罪も慈眼視衆生の。佛の恵みに消失せて。心の垢に汚れる此笈摺は則ち三衣。胸にたへざる普陀落山淨土の臺も其身にある。廣大無邊の大慈大悲信すべしと。辯に任せる順禮功德も爽かに語るにぞ。

鬼次郎夫婦ははつと感心乳母は膝を丁ど打ち。有難や忝や其發明なお心では。物の噂分聞入れも人には勝れましまさん。阿闍梨様にも口止し今まで語らぬ物語。先づく是を御覽せと風呂敷包の箱取出し。是は是名を三日月と申して三條小銀治が鍛つたる薙刀。此劍の因縁を語るが直に鬼若様。御身の上の咄しぞや。扱も御父別當辨眞。男子一人なき事を深く歎きましくして。三所權現に立願あり。ふかき祈の驗にや或曉の夢の告げ。男子を授け與ふるぞと神託正にまざまざしく。枕に残る此劍あら有難やと奇異の思ひ。神の御吉に違ひなくお袋様は御懐胎。ナウ姉御様。お前は其時まだお四つの乳まされ。妾を乳母に附けられて育て參らす其内に。お腹にまします苦子の當る十月も持越して。一月二月三月四月半年經ち一年經ち。重る年月御産なく。不思議といふ内に御運拙き辨眞様。源氏に由縁まませば清盛公の咎めを受け。平家の爲に御腹召され其身も家も亡び果て。頼む方なきお袋様妾が父を力にて。浮世に狭き御暮し數ふればはや七年。病氣の業かと取々の噂も辛き平

家の無體。播磨の大掾廣盛が邪の政道にて。御痛はしや母君を双に懸けたる其悲しみ。歎きの中の悦びと。御死骸の疵口より誕生。ありし御身ぞや。七年ましませば生れ立ちより猛々しく。妾も詞も恐ろしさに直に御名を鬼若と。付け參らせて此寺に隠し育てし十三年。扱こそ母御の命日が取りも直さず誕生日と。細細語るを半分聞き。何母人を双に懸けしは廣盛が業なるとや。任せて置けと裾かきい棄げ。奥を指して入らんとす鬼次郎抱留めやれ待て鬼若。今の話を聞くや否。駈出す怒りの面色仔細を聞かねばやらぬ。いやさ仔細も五さいもなし。奥に居る重めは廣盛が忝岩千代丸。首引抜いて母上の追善供養と又駈出すを引留め。廣盛が母を討ちしは十三年以前にて。岩千代とやらが知らぬ事。其上に今爰で彼を討てば父廣盛が。風を喰ひ用心

せんは必定。父辨眞の生害かたゞ誠の敵と言ふはな。平の清盛此鬼次郎も舅の仇。殊更三代相恩の主君と頼む源氏の仇。無念さは幾許ながら時節を窺ふ此順禮。御達は又父母の跡弔ふが出家の役。先づ静まれと制するにぞ。なう忌々しの出家呼ばはり今の話聞く上は。愈坊主は嫌ひく。エ、残り多い岩千代め命冥加な小悴と。奥を覗んで齒ぎしみにフシ無念涙ぞ道理なる。老女はほつと溜息吐き。よしなき昔物語却つて出家の妨げと。なつたるは何事ぞやこれ鬼若様よう聞かしやれ。世の常の懐胎にて十月の苦み懸くるさへ。莫大の母の恩ましてや是は七年の。長き月日をお腹に持ち起居にも寢臥にも。心休まぬ身養生探食に其身を苦しむる。辛さを何といはた帶。

の親知らぬ。不幸の罪は如何計りさりとては心を直し出家を遂げて下さりませコレはないお子ぢや賢いお人。おつと言うて給はれとすかし宥めて掻口説く。ヲ、夫程坊主にしたがるからは。頭こぼたぬ其内に眼前敵の岩千代め。踏殺して腹癒えると立上るを何處へ。疎ましの氣違ひ様と半身叶はぬ腕にも。誠を盡す心の力流石にも振切らず。フシ放せくと留まらぬにぞ。久し振で捻り餅進ぜずば成るまいと。太腿ふつつりあいたく。是でもか、あいたく。痛いなら聞入れて坊様にならしやるか。エ、無理な胴窓な。いかに言ふ事逆らふとて主を掴つて大事ないか。主であらうが親であらうがお身のお爲になる事なら。抓るは愚か杖でも當てるを則ち忠義といふ。まだ此上にも腕白おしやればかうして置くぞと又ふつつり。理窟に詰められ身を抓め

られあいたくと言ふより外。餘の返答は泣寝入身を打ち。伏したるいちらしさ。主從誠の折檻を身にしみくつと覚え込み。此鬼若が成長以後判官殿に附添ひて。安宅の關の謀主人を打つたる金剛杖。げに辨慶が忠心と譽れを残すも此乳母が。育て方とぞ知られける。性慶阿闍梨奥より立出で珍しや柵の前。聞及びたる鬼次郎殿。鬼若が成人嚙満足に思そなう。仰の如く貴院の御慈悲恵みを以て人と成り。兄弟一家の對面致す偏に御恩は忘れじと。夫婦敬ひ悦べり。老女は差寄り小聲になり。豫ての願ひ今日は鬼若様にも髪剃させ。妾も共にお剃刀戴かんと存せしに。例のわやくの髪惜み今すやくと寝入りばな。此間にこそくと頭髪剃すは師匠のお慈悲。御苦勞ながらと頼むにぞ。いやいやそれは無體の業。假令髪を剃つたりと

も心に納得あらざれば。發心とは言ひ難し。地折を見合せ教訓せばさのみ出家も嫌ふまじ。獨り日を覺すまでは寢させて置かれよ。先づ今日は老女の望み剃髮遂げさせ三衣を與へん。いざ佛間へ同道あれ鬼次郎殿。こは段々の御懇情御禮は詞に盡きず。それ女房仰せに任せ乳母を佛間へ介抱せよ。某は此間に登山し觀音の寶前へ。札を納め歸るべしと禮儀を述べて立出づれば。二人の案内性處阿闍梨ア闍梨佛間に伴ひ入り給ふ。時刻移れば岩千代丸人々誘ひ立出でて。ヤア是は鬼若正體もなき高野。實の鬼がうめくとも是程にはあるまいと。地笑ふを圍平押鎖め。憎さも憎し臥ふさつた間に最前の意趣ばらしと。地積重ねたる机の上より硯取出し墨こつちり。握拳の返報に頬を草紙の握筆。額頬べらべつた〜當り次第に書汚し。是がほんの黒鬼ちやと。シ思

はずどつと打笑ふ夢に目覺す鬼若丸墨に汚れし寢惚顔眺めて吹出す稚兒もあり。呀アき笑ふに心付き。枕に置きたる件の箱蓋はこぶた押明けて薙刀に。影を映して扱こそく。うぬめ等がほでてんがう力業では叶はぬと。大事の類で手習ひ面白く。兄弟子がひに教へてくれんと言ふ間もあらせず積置きたる。机文庫をぐわたくぐわたく引綱んで打付ければ。ばつと逃散る稚兒櫻嵐の庭の烈しきに。雪を飛せるおしまづき文庫は襪を降せる如く。姿は風神雷神のア出現あるかと凄じし。さしもの圍平支へかね。家來ども參れ參れ鬼若が暴るゝぞ。地あれ打据うちすぬよ繩懸けよと。呼ばはる聲に徒士若黨アしどろになつて驅付くる。地騒ぎの音に驚きて性處阿闍梨も出給へば。お京が肩に助けられよろほひ出でたる尼衣。いづれも暫しと押留め。これ其處な腕白様。其

形は何事ぞ。力業悪あがきが母御の供養になるかいの。地稚兒達も御堪忍お侍も御了簡。頼上ぐるは此婆が袈裟衣アに免じてたべ。お訖申すと姉諸共詞を盡せば圍平怒つて。ヤア堪忍も了簡も法に過ぎた慮外奴。サア其處が御了簡言は童の前途なし。取上げては大人氣ない。大人の喧嘩になるものと言ふを打消し大人氣ないとは某へ當付けての一言か。エエ地面倒な梅干婆すつ込んでけつかれと。荒げなく踏飛せばあつと伏したる老の身體。お京ははつと驚きて抱きかゝへ擦摩り。心地如何といたはれどもはや言舌にあやもなくア息も次第に弱り行く。鬼若見るより堪らばこそくわつと怒りの大音上げ。サア汝等が百年めかう並んだ奴輩。一人も生けては歸さぬ手本は先に見せ置きたる。地机にかゝつてくたばれよと振上げて打ちなぐれば。それ適

すなと團平が下知に群る雜人ども。向う
て莫るを事もせずはひ打ちもどきの拜
み打ち。めぐりあへば雑拂ふ机のすね
骨。三重腕限り。馬打掃りく。追行く内も
乳母これなう。心地は如何と立戻り心を
付ける呼生ける。透間を親ひ切付くる團
平がそつ首捕へ。引撥いで打ちつくれば
庭の井筒の立石に。身體は碎け死して
けり。先づ一匹は片付けし小びつちよめ
は何處にと尋ぬる内に彷徨く岩千代。ヤ
アませせ者めござんなれと引擱んで立つた
る所へ。鬼次郎駈付けこれく鬼若。■
敵の悴といひながら御恩を受けし阿闍梨
の御弟子。命を取つて益もなし最前の詞
忘れしかと。■めませに知らせば打領き。
姉婿の一言背くが厭さに助けてこます。
赦免狀は汝が面と筆押取り。助け歸す小
粹一人。鬼若判鬼次郎判と戯れ書に岩千
代は。顔を汚され突飛され命からが

ら逃げて行く。鬼若やがて老女に縋り。
これなう姉様。乳母はもう死んで仕舞う
たか。ハ、アツ南無三寶。父親にも母親
にも僅た一人の大事の人。■澤山さうに
乳母々々と言うたが今では悔しい。■な
う最一度和子かと言うたも。今から誰
に抓られう甘える相手がないわいのと。
さしにも荒き荒者が大聲上げておいく
泣き。足摺したるいぢらしさお京は我が
身の悲しさと。鬼若が心の内思ひ遣つて
正體なき。歎きに弱る鬼次郎も。心に攻
來るッ涙の玉止め。■兼ねたるばかりな
り。■やゝ泣入つたる鬼若丸ア、さうぢ
やく。■よしなき悔み愚痴の歎き。返
らぬ昔の父母より重きは老女が末期の願
ひ。法師の姿となるならば未來の迷ひも
霽れなんと。■廣庭の傍なる閻伽井の釣
瓶波上げく。もみにもんだる稚兒鬻
の。■柳の。髪も我が顔の汚れも清く

曇りなき。母の形見の此種刀父辨眞の割
刀を。■戴く心の自割ぞと一割そつては棄
■思入無爲。二割三割眞實報恩施やんと割
つたる法師振。うつすは末世に名を留め
し。■播磨の寺の鏡井戸。ハ、ア■我な
がら荒くれ坊主。形を變ゆるは老女の手
向心を變へぬは親の爲。法師と見せて武
をかくす文字を直に武藏坊。父辨眞の辨
の字と性慶阿闍梨の慶の字を。一つに寄
せて辨慶々々。■辨へよろこぶ法の友三
衣も直に烏羽玉の。■墨の法衣は形見ぞと
押戴きく。■身に着したる玉襷是も思へ
ば最後まで。老女が突きたる桑の杖中風
の藥引替へて。忠義武道の藥となる此種
刀の假の柄と。■手巾を以つて括り付け。
振替けたる法師武者三塔の勇僧と。■世
に破ひしも。■理なり。■性慶阿闍梨歡喜あ
り法の道にも武の道にも。■叶ふは忠義孝
行心けに頼母しき初發心。■急げや急げ都

の門出。ハア有難き師匠の恩猶此上にも頼み置く。老女が亡き跡弔ひの御法は爰に書寫の山。順禮修業の鬼次郎が是より直に行く先は。丹後の成相女夫連都に歸り尋ね逢はんが。先づそれ迄はさらば。さらばと別れ行く足も。跡に引かるゝ老女の名残お京が袖に涙の瀧。岸打つ浪は三熊野の那智のお山の馴染をも。爰に捨置く生死の道悟りを得たる辨魔が。心は清き薙刀も義心も放さぬ荒法師。げにも誠に源氏の礎。十六武藏辨魔と筆にも。傳へ興じけり

第三

■足は下にあつて賤しけれども不淨の役に與る事少く。手は上に位して尊けれど不淨の役を請くる事多しとかや。武臣平の清盛公保元に悪左府殿の亂を鎮め。平治に信賴義朝を討ち自然と宇宙を掌

に握り。左右を經ずして太政大臣におし成り。轡に乗つて宮中を出入す。人の恐るゝ事惡鬼厄難の如く。花族も英才も面を向へ肩を双ぶる人もなく。威權一天に出づる日の。今巳の時と輝けり。播磨大掾廣盛召に依つて參上と手をつけばぐつと睨付け。呼ばずとも未明より出仕すべき身を以て。呼ばれながら遅なはる不届千萬。豫々汝に言付けし。武藏坊辨魔めが所在まだ知れずや。次に鬼一法眼が。家に傳へし虎の巻今に於て差上げず。彼奴が返答如何に〜と囁着く如く。以ての外の不機嫌なり。さん候鬼一法眼は病中。先達て申上ぐる通り病氣本復次第お望みの虎の巻。古例の如く式法を以て御目に懸くべし。さななくては罷成らずと取つても付かれずと。聞きも敢ず短氣の大將ヤア手溫し。其鬼一め元來源氏の侍。義朝滅亡の後首打放す

奴なれども。代々虎の巻を預りしばかりに命を助け。重盛と宗盛を初め。一門の若者どもが師範に附け莫大の祿を與へ。平家重恩の身を以て何の古例格式所。病氣で脚腰が立たずば。膝行つてなりとも持つて來い何故言はぬ。イヤ其段はぬかり申さず。左様の返答廣盛は得言ふまじ。直に申上ぐるか。虎の巻を御目に懸くるか二つ一つの返答。今日中と申渡し候故。皆鶴といふ娘を以て。ともかうも御返事仕らんと申せしかば。何れの道にも追付參上仕るべし。扱君は辨魔ばかりお尋ねなされ候へども。外に鬼次郎鬼三太と申す兄弟の曲者あり。兄鬼次郎は辨魔が姉。椰と申す女に縁を組み熊野に育ち。源氏に心を傾け當家を狙ふと承る。此兄弟鬼一法眼が弟と申す故。詮議の好き手掛りをお次まで召連れ候。此者は笠原湛海と申す。鬼一が兵法の高弟にて

披群びぐんの強力ぢから不敵者なり。地彼を召出され
詮議仰付けられば。鬼次郎鬼三太は申す
に及ばず辨慶が在所も。委細相知れ申す
べしと言上すれば。それ呼出せと召に隨
ひ湛海は。ガがて御前に立出づる。厨子細
は廣盛に聞きつらん。鬼次郎兄弟辨慶
が在所知るべき。分別あらば語れ恩賞せ
んと仰せける。間ハア分別と申して。御前
歴々の御智慧に及ぶべくも候はず。我等
鬼一法眼一の弟子にて候へば毎々入込み
申せども。深く包み隠し候か是まで鬼次
郎鬼三太と申す弟ありとも承り候はず。
君豫て聞き召さん。鬼一法眼皆鶴と申
す娘ばかりにて家を知るべき男子なし。
弟子は子も同然殊に某は一の弟子。間家
督を譲りさうなものなれども左様の氣振
もなし。折々皆鶴が方へ戀慕に事寄せ玉
章を以て言入るれども。地一度の返事も
致さずと言はせも立てず廣盛。間これこ

れ湛海。其跡式の事は御前の聞きす事
でなし。鬼次郎鬼三太辨慶を。搦捕る
分別あらば申上げよ。間いやおせきなさ
るゝな。是を申上ぐるが則ち分別の手懸
り。御權威を以て皆鶴を某に娶せ。鬼一が
跡式仰付けられなば彼の家に入込み。智
謀計略を以て。早速鬼次郎鬼三太辨慶を
召捕り。地差上ぐべしと忠節に我意を差
混ぜ申上ぐる折節。鬼一法眼が名代とし
て。娘の皆鶴参上と。披露の跡より。さと
薰る。地初めてといひ女の身。君の御
前へ出る事は流石に面耻かしく。薄氷を
踏む思ひにて。心空飛ぶ皆鶴姫ヲシ遙か。
末座に畏る。思ひ懸なく湛海悔りせしが
立寄つて小聲になり。間今も御前へそも
じが噂申上げたり。何事の出入氣遣ひ千
萬。心得ぬ事あらば後稱は某。女夫連で
來たとじつと心を落付け給へ。斯様の所

で出逢ふも縁の深さ。地心が届いたと思
ひ給へとヲシほのめけは。むつとせしが
御前といひ。人目うるさく摺退けば猶摺
寄る。廣盛見かねこれ〳〵湛海。御前と
いひ御用あつて参る女に。不法法至極罷
立てときめ付くる。清盛公奥齒門齒一つ
に嚙出す高笑ひ。ハ、、、ア、我前
にも憚らず。うい奴能く濡れた。間口説
き畢せたらば清盛が媒人鬼一が跡取。
又口説き畢せすば鼻を殺ぐと御戯れ。湛
海は順風に帆。戀の追風便り好しとコレ
皆鶴。間度々の文に言ふ通り。夫婦にな
つて給はれば詞要らずに師匠の跡もして
やる。けれどもそもそむじが應と言はぬ故。
地跡も取られず然れば身上の敵戀の敵。
君は如何なる敵の末ぞ。思ひ忘るゝ隙も
なや。エ、因果めとヲシ抱き着く。ヲうる
さやと突退け押退けずんと立つ。どつこ
へと梶を扣へ。びんしやんなさるゝ程。

猶戀風が身に沁んでぞつとする。ついで一口のお返事。そんなら長うは言はぬぞえ。つい一口に厭でござんす思ひ切らしやんせ。又父上の家督の事も外に男の子とてはなし。假令厭と言はしやんしよが御器量次第で此方から頼んでも譲らぬでは。申すも愚かながら。我が父の傳へ及びし虎の巻と申すは。家が齊へ國を治め天下を平にする基。其器量にあらざれば。此書を傳ふる事難しと豫々父の物語。此書は打太刀の顛ひも止まぬ身を以て。鬼一法眼が家督には些と慮外でござんせうと遣込む。ムウ聞えたそも

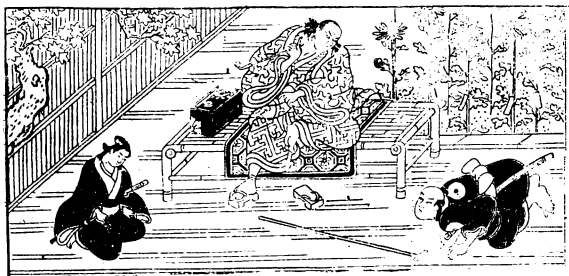
や。御前に於て勝負次第。智になるかならぬか縁定め。慮外ながらお小性業。長刀竹刀をお貸下されと乞出し。サアサア勝負と。氣を急いたり。此上に辭退せば父の名までも汚さんか。力なしお對手にと。怯めず臆せず立寄りて。御端戸の引手の懸緒かなぐり取り。上着靜々脱置いて女手業のしやんくと。結んで肩にふはと懸け振袖絞る玉襷。長刀掻込み突立上り心を配る身構へは。漂々しくも亦しをらし。物に動ぜぬ清盛公そぞろいで見え給へば。伺候の人々堅唾を呑む。湛海荷つて聲を懸けはつしと打つを双に向けて受け。引かば入らんと位を取り互にためらふ虚々實々。開いて解けばさつと引き。又打懸ける獅子奮迅沈んで拂ふ虎亂入。透をあらせず飛達へ込む手。確々手十文字雙方秘術を盡すと見えし。とにかかく長刀湛海が。眉間のかねを些と

も去らず。コレ。是が眞劍なれば。首が袈裟か立割か覺えてかと。押取直し。疊懸て打立てられ初めの詞の耻知らずヤア。今の疊に亡つて。思はぬ負と口減らず倒つ轉びつ逃出づれば。人々思はず聲を上げ。褒めつ笑うつ取々に。暫しは鳴も鎮まらず。清盛興に入らせ給ひ。女なれども流石鬼一が子程あり出来いた。して所望せし虎の巻持参せしかとありければ。はつと答へて持たせし箱を取出し。恐れながら秘密の書。密に御上覽と差上ぐれば。手にも取らずからくと嘲り笑ひ。神道には秘密と言ひ。眞言宗には密法などと馬鹿盡して。人に包み隠すは何の痴事。秘密する程の大事ならば猶普く人に知らせ。面々に心得るこそ世の寶。密に見よとは狭し。聲一ばいに高う讀め聞かうするはとの給へば。ハア尤な御意なが

ら。地際すには仔細ありこそせめ。是非密
 にと言はせも立てず播磨の大様。コレコ
 レ女。御説を返す恐れと言ひ斯く言ふ
 廣盛を始め。此座の人々誰か君の爲命を
 惜む者なければ。聞いて些とも苦しから
 ず一越調をかすり上げて高う讀め。眞
 眞げに此上は辭するも結句慮外かと。眞
 紅の紐をとくくも。巻押披き聲を上げ
 それ。兵法は。國の大事生死の境。存へ
 亡ぶる基なり。さるに依つて唐土の明主
 月の夜雪の美景にも御心を樂まず。仕臣
 を集め問答し。兵書の奥義を極め給ふ。
 されば其書は。文武龍虎豹犬の六韜。六
 十一の。太公望の答を初め。所謂孫子吳
 子。司馬法大宗問答尉繚子三略の書を宗
 として。フシ七ツの文のことわざも上を
 崇め。下を撫で。惡と知つて爲す事な
 く。善として捨てざれば自然と。天下
 太平なる。これ三。略の教なり。

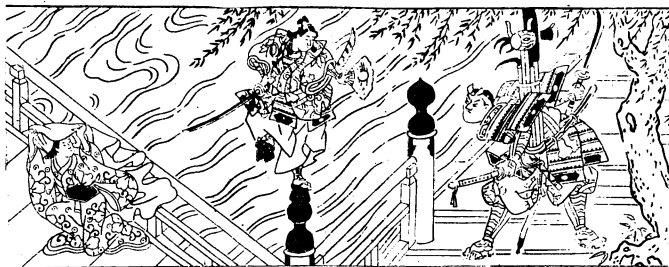
然るに平相國清盛公此教を守り給はず一
 院を鳥羽に苦め奉り。民を虐げ惱亂し色
 に耽り酒に長じ當家を亡さんと企てし。
 左馬頭義朝が妻。常盤を深く寵愛と讀
 立てさせず廣盛。これく女そりや何を
 讀む。義朝が後家常盤が事何憚りの有
 るべきぞ。君にも十年餘りの御寵愛ちと
 古臭う思召し。一條大藏卿長成といふぬ
 るま公家へ突付賣の嫁入近日祝言がある
 筈。猪口才を吐し酷い目に逢ひをらう
 と脇を張つてきめ付ければ。はて是は自
 らが作つて讀むには候はず。此巻物にあ
 る事を高う讀むが自らが役皆様は聞か
 役。讀んでお聞きなされませ。常盤を深
 く寵愛し貞女の道を失はせ。其身も不義
 の名を得給ふ。恐るべしく。平家は彼が
 夫の敵。折がな仇を報ぜんと心に劍を
 まざらんや。子として是を歎かざらんや。
 諫めんとすれば親子面を合すに忍びず一

の中納言平の朝臣重盛。父の爲に教訓狀



つこの巻物に記して是を捧ぐ。孝子小松

件の如しと讀終れど。初め高うとどよみ
 しも後は呼く人もなく鎮り返つて居たり
 ける。讀出す半ばより清盛公の面色。黒
 うなり赤うなり澁面鼻に息つがせ。しせ
 き上げく見えければ。廣盛機嫌を察
 し遣り進出で。是は是はけうがる悪口。お
 腹立御尤も千萬ヤイ女。賢人と呼ばるゝ
 小松殿。他人の汝を頼み。斯る落書を差
 上げ給ふ筈はなし。ム、ウ聞えた。必定
 雜人輩が。小松殿と名を借つてお目に懸
 くるに擬ひなし汝も同類。女なりとて赦
 されず何としてくれんと。掴み着かんず
 其勢ひ案の外なる巻物に。皆鶴も讀みは
 讀みながらだくつく胸を押下げく。是
 是は思ひも寄らぬお咎め。最前お出の砌。
 病氣本腹致さすば。是非虎の巻は御目に
 懸くまじと申切つて候へども。其返答直
 に申上げよとの御難題。家内の行歩さへ
 叶はぬ鬼一なれば。私を以てお斷りの爲
 出仕致す次の間にて小松様。是は日本の
 虎の巻御目に懸けよとお渡しなされた。
 外の人には頼まれも致さず。委しき事は
 小松様に。お尋ねなされと言分くれば
 頭を掻き。エ、子の身として親をひづ
 め。したい事させぬも小松殿の生れ付き。
 清盛公の女好もお生れ付き。常盤が斃死
 りもせず。貞女を背いたは常盤が助平と
 言ふもの。小松殿を日本の賢人と人は言
 へども。此廣盛が目からは。日本一の不
 孝人ぢやと存する。恐れながら御前にも
 必ず是に懲りさせ給ふな。此後も御目に
 さへ入らば。天子宮方のとつておきでも
 只置給ふな。大將がしたい事せいで。是
 此日本が治らぬと。機嫌に入る事掻集め。
 持つて參れば面色和らぎ言ふにや及ぶ。
 子の言ふ事を聞入れるは親馬鹿と言ふ
 もの。言は言へ用ひぬく。兎角廣盛
 でなければ夜が明けず。鬼次郎鬼三太



辨慶めが事は湛海に言付け。兄なれば先づ鬼一めから今日中に詮議せよ。阿ヤ女。古例も格式もへちまも要らず。虎の巻は明日中に差出せと親に言へ。萬一辭退せば吃度計ふべき旨あり。歸れやつと御座を立つて入給へば。皆々御前をばらりと立ち。ハルシ皆鶴一人は一生の。阿波の鳴門を越ゆるとも。よも此上は嵐吹く。肌には。汗の立つ波や。袖を絞りて。三葉井戸と釣瓶はヨヤヨヤヨぬれようた中を。人が水波みや音に立つトヨへ。水と柄杓はナヨヤヨヤ。洩らさぬ中を。人がナホスシ滴して濡と知る。今出川に名にし負ふ。吉岡鬼一法眼が一構へ。非番の下部がはき掃除。奥の花壇に色榮え勝る菊の品々花盛り。打水玉を置く露に。フシ擬へて虫やすたくらん。ハルシ中居の木櫛。走り出で。これ智恵内殿。お姫様お歸りの遅いをお待兼ね。

気が盡きた花御覽なされうと。お居間の庭から殿様が爰へ御出でなさる。花壇の傍へ床几を直し。此褥敷いて置かしやれとフシ言散して駈入れば。何殿が御出でなさる、好い時の掃除仕當てたと。勝手へ走り引抱へて持つて出で。何處に置かうぞ此處らに床几押直し。ア、結構な清團ぢやな。不斷此上に坐つて冷えぬやうになされても。發る病は是非がな。寧そ我等がやうに寒晒しの褥が勝しかいと。地ぶつく内に駒下駄の音聞ゆれば。ソリヤ御出でなされたと逃出づる。切戸の内より女中の聲。これ、智恵内何の御用のあらうも知れず其處に居や。ナイくくとフシ小蔭に隠れ畏る。吉岡鬼一法眼は病苦忘るゝ氣晴しと。女小姓に介抱せられ心勇みの駒下駄に。石踏分けて花畑廻し。ホ、ウ咲いた咲いた。此花開いて後更に花なしと思へ

ば。取分け色香の身にぞ沁む。これ此菊は打水に露を含みて濡鷲や。斯程優しき花の名を誰が石わりと名付けけん。主殿司と御垣守二つ一つの大内山。天が下には隠れなき花の笑顔に打着せて。フシ名はけおされぬ。京小袖。例へば花の物狂ひ羅生門に住む鬼なりとも。紐解き初むる大般若御法の菊を見る時は。心和ぐ敷島や。されば彭祖が七百歳。姿を變へぬ若やかも。此徳なりと菊の露我も齡を延えんと。暫く眺め佇めり。機嫌よく床几に腰打掛け。ヤイ女ども。庭の掃除は智恵内めか呼べ逢はう。ソレ智恵内殿召しまするはつと應へて立出づる。花壇には塵一本も置かず。目の前の掃除は丁寧なれども。松楓白膠木などの邊は。落葉も掻かず捨置きしは心あつてか。但し又目通りでないと思ふ不精か。陰日向あつては後暗し。以来を嗜み奉公せ

よとありければ。是は殿の御意とも存ぜず。熊野の奥山家に無骨には育ち候へども。御奉公に陰日向は仕らず。總じて塵埃と申す物も。一つ二つ落散らばへば其座を汚し。見苦しく候へども。又塵塚に山の如く集る時は。多くても見苦しからず。それ故花壇の塵は取捨て申せども楓白膠木などは。落葉を御覽なさるゝが一興と存じ。熊と帯は入れ申さずと申上ぐれば。流石の鬼一こりや尤も。花壇の位に依つて奇麗に掃除し。落葉の庭は落葉を愛して落葉を拂はず。ム、ウ名將は士卒の賢愚。得失をよく辨へ其器に應じて使ふといふ。軍法の奥義も其理に同じ。尤も／＼近う奇れ小分別も有る奴を。何故智慧ないとは名付けたな。殊更熊野育ちとあれば懐しく。我も熊野の山家に鬼次郎鬼三太といふ二人の弟あり。扱は殿のお生れも熊野の山家か。

イヤ／＼弟も我も出生は都なれどもな。兄弟引別れ。弟が熊野に育ちし其起りは。我親もかくいふ鬼一も。本は源氏譜代の侍なれども。六條の判官爲義左馬頭義朝。御親子の申好からず弓矢の道に背き給へば。源氏の滅亡遠かるまじと見つけし故。末の奉公せさせんと。三歳五歳の子を母に預け誠めを殘し。熊野の山深く忍ばせし其子は今の鬼次郎。鬼三太といふ我が弟。又某を近く召され。汝はともかくも世に存へ源氏の成行く末を見届け。大將の器に備り給ふ人あらば。傳來の虎の巻を傳へよと。其身は御親子の御身持を憤り。病の床に。みまかり給ふ。思はぬ昔語に涙が零る。病の障もう語るまい。あなかしこ人に洩すなど。ありければ。我等其鬼三太清悦と言はんとせしが心を領め手を支へ。お家に在りながら初めて承つたる。御兄

弟のお別れさこそ思召すらん。扱只今にも彼の鬼次郎殿鬼三太殿。それと名乗つて來り給はば如何し給はん。恐れながらと伺へば。夫は鬼次郎鬼三太が心にあるべし。父の遺言で候なると源氏に心を傾け。平家に敵たふ心なれば縛り括つて清盛公へ差上ぐる。何故と言へ。鬼一が今の主君は清盛公。平家に身を任する我なれば弟とて用捨は成らず。言はぬとても知れた事。根問ひ葉問ひせずとも。汝も花を見よ。女ども久しく煙管に對面せず。一服喫んで見ようか。ソレお煙草と御意遊ばす早う／＼と取傳へ。煙に對を吹混せて。花に餘念はなかりけり。爰に源氏左馬頭義朝の八男牛若丸。御母常盤の懷を離れ鞍馬山。東光坊の御許に忍びて成長り給ひ。十六年の春も過ぎ葛の錦は着つれども。何時會稽に懸へん杖も狭き下司奉公。心は天下を取控ぐ鬼一

を主に田面の雁。翅に懸けし文ならで直に申上げたき御用。虎藏罷歸りしと切戸の口に躡へば。娘は未だ歸らずか何の用事氣遣はし。近う寄れ言へ聞かんと氣をせけば。さん候姫君様。清盛公の御前をお立ちなされ私を召され。是より直に重盛様へ往かねば成らず。父上の嘸お待兼ね先へ歸り。清盛公の仰には。病氣を構はず虎の巻は明日中に差上げよと。以ての外の不機嫌にて。鬼次郎鬼三太と申すお尋ね者。是は殿に御縁ある御方故湛海を追付け遣され。厳しく御詮議ある筈と。直に申上げよとの御事と聞きも敢ず。なに鬼次郎鬼三太が御詮議。ハはつと驚く面色にてと胸ついて見えければ。智恵内は我身の上悔りせしがこれ虎藏。其鬼次郎鬼三太と申すは殿の御兄弟。何故の御詮議。都には金賣橋次橋内といふ者あり。若しそれが名を開き

違へ。鬼次郎鬼三太と申し誤りではないかと。念を入れるれば法眼。いやく虎必定期詮議ならん。それはそれで知らぬで済む。ヤイ智恵内。それ虎藏めを是で



蔵が誤りにあらず思ひ當る事あり。彼の兄弟豫て源氏に心を寄すると聞きしが。と。打て。エイヤさあ打つてく打据ゑよと。ついたる杖を投出す。とは何故と

仰天すれば。ア何故とは是程の不奉
 公氣が付かぬか。高きも賤しきも奉公す
 る身は。それ／＼に勤むる役あつて其一
 色に疎からねば。不調法者とは呵られず。
 先づ虎藏めが今日の役目は。娘が初めて
 の出仕。草履掴むが役ならずや。此お使
 は先拂の衆か押への衆に仰付けらるべ
 し。重盛公へ御参あらば。猶以て御草履
 仕らんと何故言はぬ。六波羅の玄關前
 一門の御所の案内。とつくと見覚えすはと
 言はゞ晴の草履。引摺まんと思ふ性根は
 なく。役目を捨てゝ歸りし不忠者。打て
 と言ふが誤りか。ア、イヤ皆御尤も。其
 氣の付かぬは年端のいかに故御地忍これ
 虎藏罷出でお詫び申せ。言ふな／＼詫言
 間かぬ。誤りでなくば智恵内打て。ハ
 アはつと杖は取りながら打ちかねて立ち
 かねる。アヤレ打て。ハア何故打たぬ。
 ハア。汝も主の詞を背くか。いや背

きは仕らず。仕らずば打ちのめせ。鶴
 い／＼とばかり立つ居つ居つ角。打
 めらしてくれんと杖振上げ給ふ所へ。皆
 鶴姫立歸り是はと縄り留め給へば。アア



たす身を脱く。其杖よこせ。主の詞に背
 くは虎藏が不忠の百倍。汝から叩きの
 放せ／＼打殺すとあせり給ふを拖留め。
 虎藏を先へ戻せし無調法の起りは私。お

呵りなざるゝ程身も世もあらぬ御堪忍。イヤ湛忍せぬ是非御堪忍と詫ぶる所へ表使罷出で。御御直談ありたきとて湛海様御出なりと。地案内につれて座敷に出で。是は先生承りたるより御病氣輕さうで先づ大慶。庭に下りて何事のお世話なさるゝ。されば〱家來めが不屈故

地折檻を加ゆると。聞きも敢ずそれ御覽なされ。〱先生は御病氣皆鶴は女儀の事。確りと致した跡取がない故に。家來とも

がさばる。弟子は子なり某を皆鶴姫に娶せ。名跡を譲り給へとかね〱申すは爰の事。後日〱の見せしめ其家來め一々首をお並べなされ。ヤ是は内證。清盛公より急御用仰付けられ参つたり。〱潛に御意得たしと述べければ頭を下げ。師弟の義は内證御用とあれば上使同然。爰は端近奥にて承らん。女ども御案内申せ娘來よと手を引かれ。〱足三足歩みしが振返り。

〱ヤイ汝等郡の内は奉公構ひの暇をくれ出でうせいと。地生命重き飛石をオウリ傳ひて。奥に入りける。〱跡見送りて。牛若君ヤイ鬼三太。〱汝も我も此姿に身を驚し。あらぬ名を付き此家に入込みしは何の爲。六韜三略の虎の巻を傳へ受け。

亡父の敵の平家を亡し。再び源氏の代に翻さん爲ならずや。鬼一が打て叩けと怒りし時。何故我を打据えざりしぞ。地打たれども踏まれても爰に足を留めてこそ。虎の巻を手に入るゝ期もあるべけれ。此家を追出され立寄る事も叶はずば。何時本懐を達すべき。無念。至極と拳を握り心を〱苛つて見え給へば。地鬼三太大

きに恐れ入り御尤もの御悔み。〱其時其心の付かぬには候はねども。勿體なや譜代相傳の主君を打つは天を打つ。何處に杖を當参らすべき。打叩かぬを科とて御双には懸るとも御事とは存すまじ。地え

打ち叩かぬ無調法は眞平御免下さるべしと。メエ土にくひ着き詫ひければ。地夫も尤も君も尤も鬼に角に。主も家來も斯程まで源氏の運の拙さはと。主従目と目を

フレ見合せて忍び。歎かせ給ひしが。地鬼三太はつと心付き。〱申し〱今日清盛が館の仔細。虎の巻を明日中に差上げよ。鬼次郎鬼三太が詮議に湛海を遣らんと

身の上。〱うか〱泣いて居る所でなし。我等も分別君も御思案なさるべし。〱いやさ此期に及び思案とは手緩し〱。地虎の巻を納めたる寶藏の案内我よく知つたり。忍び入つて盗み取らん汝は八方に眼を配り。咎むる者あらば一々に切伏せ湛海ぐるめ。鬼一とて用捨すな心得たるかとの給へば。〱いや〱鬼一を討つ事は御免なれ。御免とは怖れたか。いつかな怖れは致さねども。地鬼一は我等の兄な

れば御免と申すと言はせも立てず。ヤア義に因つては親兄の首を取るも勇者の習ひ。それ知らぬ和主でなし。但しは鬼一と心を合せ牛若を追出さん術よな。此は勿體なき御仰せ。名乗合ひし兄弟ならば討つに心も怯れまじ。此鬼三太を弟と知らぬ兄を。手に懸けんは兄弟の道にあらず。恐れながら鬼一は君に振向け吾等寶藏に忍び入り。虎の巻を奪ひ取つて奉らん如何に。ヲ、尤もと頷き叫き身を堅め。心を定むる何時の間に。後に立つて細々を。聞いて驚く皆鶴姫何心なく二人の衆。まだ爰にかやとありければ二人は大きに敗亡し。いやもう爰にと返答も。詞しどろに臆騒ぐ。皆鶴するすると立寄りて若君の手をちつと執り。父様が暇遣らしやんしても。此皆鶴が命に替へて詫言し外へは遣らぬ。是程に思うて居るに難面いぞや。あの人を頼ん

で雨の降る程やる文に。よう返事しやらぬの。但しは女に惚れらるゝが嫌ひか。嫌ひなら此様に何處も彼も。惚れられるやうに可愛らしう何故生まりやつた。其方を退けて殿御とて。外には持たぬと心で心括り枕の假寐にも。忘るゝ隙は。ないわいの。父様は湛海殿と密々の物語り。女どもにも合點させ奥には些とも氣遣ひなし是智恵内。仲人は宵の程コレ其方向いて居や。サア今の内ついで寢たい。來てたもいと引立つる。あれ悪い事ばかりと手を振放し。お前はお主拙者は家來。數ならぬ身を夫程に。可愛がつて下さるはなう智恵内。忝い事なれど冥加ない御赦されませ。イヤ。數ならぬとはいかい偽り。智恵内といふは叔父の鬼三太様。お前は源の牛若君と。言ふ口を鬼三太駈寄りちやくと押へ動かせず。扱は最前より立聞し夫と知つた

るな。外へ洩れては失望のお妨げ。叔父様初めての見参。不便には思へども君の大事には代へられず我手に懸くる。懣慕ひし君の爲捨つる命惜かるまじ。未來の契りを觀念せよ南無阿彌陀佛と取つて引寄せ。刺殺さんとせし所へ湛海透さず飛んで出で鬼三太を引退け突退け皆鶴を後におし圍ひどこへ。湛海が身にも代へぬ大事の此姫を殺さうやさうは成るまい。牛若鬼三太と己と名乗る業曝し。清盛公へ注進申し御褒美には此娘を抱いて寝る。者ども館の四方を圍み取逃すと皆鶴を引立て駈出づる遣過して牛若君後より拔打に。ばらりすんど切付け給へば大袈裟斬といふ物に。二つになつてのたれ伏す。ヤア。鬼三太。皆鶴を殺害するに及ばず。牛若直々鬼一に逢うて仔細を語り。虎の巻を渡せばよし。否と言はる百年目。鬼一。兵衛の秘密を揮

ふとも。我亦鞍馬山の僧正坊に習い受けし。奥儀を盡さば手の下に討取るは案の内。鬼一法眼は何處に在る源の牛若對面せんと呼ばはつて。間毎の戸障子蹴放し蹴放し踏込み給ふ一間の内。奥は鞍馬の僧正坊飛行の翼天狗の像。忽然と現れ給へば。ハハハアツと飛退り思ひ懸なや師の御坊。何故來臨し給ふぞと謹み頭を垂給へば。皆鶴姫も鬼三太も渴仰希代の思ひをなし、ッ恐れ入つてぞ敬ひける。僧正團扇を上げ給ひ善哉々々牛若丸。妾も心も荒天狗を師匠と賞讃し給ふも。平家を討たん寸志ヲ、殊勝しや健氣なり。いかにも兵法の大事を傳へ。亡父義朝の仇を討ち。會稽を雪がん御身となり給ふべし。是までなりや僧正坊が通力自在を見給へと。面驚をかながり捨つれば誠は鬼一法眼なり。人々ぎよつと臍を消し是も天狗の障得かと、ッ呆れ果てたるば

かりなり。鬼一静々と立出で。平懐に申すも憚りある昔語りなれども。君は未生以前の事なれば知し召すまじ。元來鬼一が家と申すは。君の御先祖八幡太郎義家公に官仕へし。天野の何某。八幡殿鎮守府の將軍となつて。奥州を知し召されし時。本吉長岡の二郡を領地に賜り。本吉長岡の下の文字を取つて吉岡と改め。大江の匡房卿より傳へ給ひし。六韜三略の兵書を預り。代々公達の軍術の師範となり。御父義朝公まで奉公し源氏を離れず。今鬼一が傳へし虎の巻と申すも。彼の六韜三略の書の御事なり。されば平治の戦は君も閉召し及び給はん。御父義朝公清盛に打負け給ひ。



野間の内海にて御腹召され御公達も散り、に。或は討たれ或は流され。是ぞ源氏の大将軍と。面を出す、ッ人もなく。最前鬼三太には物語りし。父が遺言恰も符契を合せたる如し。夫に引替へ平家は日本半國を領じ。高位高官におしなり勅命と號し。一門兵法の師範たるべしと我を招く。多病なり参るまじと申切つて候へども。遠勅の科を蒙る詮方なさ。

従ふとなく平家に身を寄せし。十年餘り 鬼一といふ名を包み。の年月虎の巻を傳へよと。權威を以ては 教へんものと肺肝を碎たれども兎角摺抜け。 あはれ源氏の公達 き。娘にも宿願ありとに器量ある人もがな。父が遺言違へじと 偽り。毎夜々々鞍馬山親ふに。右兵衛佐頼朝は蛭が小島にまし に分入る。其頃君はままして思ふに叶はず。君鞍馬山東光坊の だ十歳に足る足らずの。許にて生長し給ひ。毘沙門堂の邊の岩窟 稚き御目を暗ます鞍にて。兵法修行し給ふと聞き飛立つ如く 馬山の犬天狗。僧正坊登山し。 密に人相を窺へば天性大將軍 と名乗つて對手になり。の相まします。嬉しや秘密を残り手傳へ。 兵術を授け教へしを。冥途の父が魂魄を悦ばせ。我が本意を達 眞實の天狗と。思ひせんと思へば。既に一門の師匠と仰がれ。 給ひしか。是はこの面平家の恩を蒙る身となる恥かしや。 平家を被りし僧正坊。誠は家の祿を食む鬼一が。源氏に大事を傳へ 鬼一法眼が假に似せたんは俗に言ふ内股背薬。 彼方へも付きの形なり。必ずくか此方へも附く二心と笑はれんか。よし身 君天下を知召してのの此道まで。取を付けん悲しさ。八萬四 記録にも。牛若が兵法千の軍神天地の照覽も恐ろしく。 何卒 は僧正坊といふ天狗



に。習ひしと書認させ。末世末代鬼一といふ名を深く包み隠してたべ。くれぐれ頼み存ずると初めて明す物語。驚く心に先立ちて若君涙止めかね。有難しとも忝しとも禮に對する詞はなし。鬼一殿と大地に額をツシ摺付け給へば。鬼三太心は飛立ても兄の心を置りかねて出もやらず娘はさかしく。夫程のお心ならばとても事の虎の巻を。牛若様へ進せて下され父様と。背撫摩り機嫌取る。ややく平家の糧を食ふ鬼一が。今とても源氏へ虎の巻は譲られずと。懐中より取出し。ヤイ娘は汝に譲るぞ。若い奴の事なれば心を懸ける方もある筈。是を土産に思ふ方へ嫁入せよとて手に渡せば。嬉しさ親の前とも恥ぢず豫て心を繋ぎ置く。牛若君に奉り合點かやいのと目で知す。若君押戴き懐中し。此年月僧正坊となつて劍術を教へ。今又息女に虎

の巻を與へ給ふ。牛若娶り夫婦となり。奥義を授かる上は平家を亡し。世を源に復す事掌に握つたり。此身を百千に碎いても此大恩。何時の世に報すべき鬼一殿と。エテ涙と共にの給へば。ヤア粉らしい鬼一は平家。源氏方の禮を受けて立つべきか。只今何時までも天狗々々と言うてたべ花架殿。世に便なき天狗が娘。ホシわけて御不便頼み入る。やい鬼三太。虎藏を牛若君とは疾く知つたれども智恵内を鬼三太とは最前見付け猶も試し見んと思ひ。おて叩けと無理を募り呵りしは。眞實を知らん爲。都の内奉公構ひの暇をくると云ひし心。今思ひ知つたるか。別れしはおこと三歳面相を見違へたり。母の御事も傳へ聞く。深山の奥に育てども心の花の色香は失せず。父の庭訓を守り日陰の主君に心を盡し。忠勤を勵む健氣さは兄に生れ勝つたな。二

君に仕ふる者の身の果は此鬼一を手本。火にも入れ水にも入れ身は醜になるても。卑怯な心持つなよと鬼次郎にもよく傳へよと。世に睦じく言ひければ。兄とは心に存じながらお心を疑ひ此月日。餘處になしたる無禮の段。眞平御免下さるべしお詫。申すと泣きければ。それも主君の御爲なり何故無禮と思ふべき。君も汝も草履擱となつたる故。思ひ出せし事こそあれ。唐土の張良。黄石公が脊を取つて兵法の大事を傳へ。高祖に仕へ漢家四百年の基を開きし。夫は張良は牛若草履取になり給ひしも。虎の巻を傳へん爲共に出世の吉左右目出たし。言ふべき事も是限り娘鬼三太若君の御供し早落ちよと。言ふより早く差添ひん抜き太腹にがばと突立つる。娘は驚きわつと詞も泣出す二人も左右に抱き付き。刀を奪ひ取らんとすれどもちつとも放さ

す。何でも切掛つた腹を留めて何とする。イヤ我々落行かば共に御供申さん爲ア悪か。命ある内は平家の鬼一法眼。汝は源氏の牛若丸介抱に預るべきか。穢はし爰放せと突退け。えいやつと引廻し苦しき息をほつと吐き。引ハ、ア返すわ。木は木火は火水は水只今返す斷未塵。平家の祿を食込んだ此腹も。切つて返せば五臟六腑に思も残らず。魂は元の源氏又立歸る。今生の忠義の納め。檢使を乞受け瀛海を切つたるは鬼一なり。切腹致せしと欺き。心安く方々を落さん爲の切腹。サア早く落ちてたべ。落ちぬ内は何ぼうでも息引取らぬ。苦痛さするが面白い。一足も早く影を隠しておくりやるが親兄師匠への孝行ぞや。情知らず早落ちぬかと言ふ聲頭ひ咽返れば。娘は正體歎き伏し若君も鬼三太も。親に離れしは當歳三歳悲みは覚えねど

も。思も慈悲も哀しさも此上のあるべきかと。天に問え地に憧れ。猛き心も搔幕れて歎き。沈ませ給ひける。サア遅なはるか恩知らず。思ひ思うて切つたる腹をむだ腹にするか。大死さすかと呵られて。いふべき詞も涙ながら三人打連れ情々と。行きては歸り歸りても遣る方分かぬ足弱車廻り。逢ふべき時節も泣いてみ見ては泣き。一つ所に佇めば心は鬼と勇めども。流石親子の。此世の限り。なう言殘せし事のあり。一度天狗になつたる鬼一。魂は冥途に赴くとも魄は魔道に分入つて。再び誠の天狗となり西海四海の合戦といふとも。影身を離れず弓矢の力を添へ守るべしさらば。ハツア返すも情ある程身の冥加。辨へ知らぬにあらねども義理に引かる。牛若君。跡を見捨て、出で給へ足もしどろに皆鶴姫。翼しをる、別の露。鬼三太一

人が心を鬼。鬼の目にさへ涙の雨の。ふる手を引立て介抱し泣く。出づる出世の門。文字に二つはなけれども。我は出世父は又此世を出づる菩提門。門々不同八萬四爲滅無明果業因利劍卽是彌陀號と。三人一所に立並んで。なむあみ陀佛。南無阿彌陀佛願以此功德往生は。安樂國にて此四人。必ず一蓮托生と心を。殘して出でて行く

第四

千早振神のひこさの昔より。傳へそめにし舞歌の道能きといふ字を能と呼ぶ。此日の本の瓶絶えぬ例も長月の。菊の詩。打囃す花の色香の院の御所。築地遙に洩聞ゆる鼓の音色横笛の。ひしきはひいや檜垣の茶屋與市が。床ぞ賑はしき。ハハハ。廣き都も。心から。狭しとばかり世を忍ぶ吉岡鬼次郎幸胤は。源氏の種

の埋木に心を盡す忠義の花。菊のお能の折柄を。心懸けたる夫婦連。聞及んだ檜垣の茶屋とは此方か。御免なれと腰掛ければ。成程是が檜垣の茶屋。又拙者めが名を直に與市が茶屋とも申します。常に店は出さねとお能さへ御座れば

私の承り。住宅の白川より水を汲んで運ぶ故。檜垣と御名を付けられし由緒ある茶の入端。先づ一服と差出す。いかさま花の都とて何から何まで華奢風流。手前は遙か遠國者此度初めて罷上り何事も不案内。京衆の咄を聞くが國元への土産。先づ此御所のお能といふは。一年に二度とやら聞及びしが左様かな。いかにも春は櫻のお能秋は菊のお能とて。兩御所の御觀賞。我々風情が詞に懸申するも勿體ない。さりながら只今では。お痛はしや王様を鳥羽の里へ押籠めて。平家の大將清盛殿が我儘の榮耀榮華。菊の能に限

らず。イヤ紅葉の能で候の。イヤ松茸の能で候のと色々の名を付けて。月の内には五度七度。檜垣の茶屋もほつと秋風。店を出さねば何故出さぬ。せんじ茶を背くかと煮返るには。困りますと。商賣柄のちやはく口。いかさま平家の繁昌は國元までも隠なし。夫について彼の常盤御前といふ女性。一條大藏卿とやらへ送られしと承るが。下々の雜説か。但しは又誠の噂か。誠も誠きつい誠。何ぼ氣強い清盛でも。小松殿の御意見にはぼしと鉢巻我子の手前の口塞に。一條大藏の卿長成といふお公卿へ進上の奥様。此十日計り以前に御祝言も相濟み。しかも今日のお能が。その。大藏殿常盤御前御夫婦をおもうしの馳走。イヤ又此大藏卿殿といふ人が。京一番の見事仁付けう薬のない。いかに平家の權威ぢやとて。十年餘りも清盛の簪にかけた上り膳を。

應と言うて坐らるゝ。是が則ち旨い正銘。エ、今朝ならば見せまじよもの。能見物にわせられた其勿體。衣紋付なら仁體なら天晴の公卿なれど。十日蛭子のさ、に付ける五百目包で見かけ計。此大藏殿に智恵のないと。狐が読へた茶碗に。絲底のない事が隠れないと語るにぞ聞いて。お京も打笑ひ。其まあ常盤御前とやらも御一緒にお出とや。音に聞いたる御器量。どんなお顔ぢや拜みたいと知らぬ顔に裏問へば。いやく。常盤御前は俄の御病氣でお出なされず。其名代に。ア、何とやら。ヲ、それく。大藏卿の御家老八匁勘解由左衛門のお内儀。鳴瀬といふ發明な女中が。彼のぬるま殿の介添にわせられました。イヤぬるま殿の介に懸つて。あつたら茶まで温ま殿。汲直して上げませう。イヤく。最早所望にごさらぬ。些と此方に咄す事。暫しの間

御遠慮頼むと、フシほのめけば、コリヤ旨門。樂屋の人数は一群に、下ハハ下ハハ戯き申す
い。時分柄杓の針、よゝ釣申す釣られ申
す。しつぱり様と吞込み顔。ツシ茶釜のツシ茶釜の
陰に氣を通す。鬼次郎小聲にお京を近鬼次郎小聲にお京を近
附け。大藏卿の院參亭主が噂に落付いた
り。お能も追付け滿てぬらん御歸るさに
心をつけ。随分首尾好う目見えを濟し。
直に館へ入込むが肝要。言ふまではな言ふまではな
けれど。辨慶が兄弟鬼次郎に縁ある者
と。人に知られぬ是第一。二つには常盤
御前の御身持に心をつけ。源氏を忘れぬ
志と見るならば。折を見合せ仔細を語り。
主従の名乗をせよ。其上の便次第某が其上の便次第某が
迎に參り。館をすいとつれ立退く跡の分
別胸にあり。首尾の善悪。一寸一筆知ら
せの便を。待つて居ると、フシ語る間に葉フシ語る間に葉
地の内お能は滿て、養老の。祝言歌ふ葉葉
瀧つの水。萬歳の道に歸りなん。地下地下
の見物押合ひへし合ひ。袴の町人醫者禪

門。樂屋の人数は一群に、下ハハ下ハハ戯き申す
豪傑同氣同性、相求め己が、オクリオクリ道々立
歸る。暫く跡より。温々温々と立出
で給ふ一隊大藏の卿長成と。名に負ふ勿
體物々しく。八劍勘解由が女房にかしづ
かれたるうづ高き。其身の位は備はれど
も心はうつとり空蟬や。猶人柄に寄らざ
りし、生れ付こそ是非なけれ。生れ付こそ是非なけれ。鬼次郎鬼次郎
夫と見るよりもお京に衣紋纏はせ。其身
は彼處に立忍べば。かねて手筈を極め置
く勘解由が女房立止り。ム、それなるは
お京殿か。上にも御機嫌好い折柄、是へ是へ
是へと招き寄せ。殿様へ申上げます。殿様へ申上げます。
是はお京と申しまして女藝者の狂言師。
先達つて夫勘解由召抱へます約束は致せ
ども。表向より御奉公と申しては。禁裡
表の聞えもあれば。今日の御歸るさ直に
お供に召連れられ。然るべう存じますと
夫が指圖承り。待たせ置いたる途中の待たせ置いたる途中の

御目見えお詞を下されなば。有難う存じ
ましよと取繕へば大藏卿。内々内々聞い
た女藝者はそな者か。はてな。いや何鳴
瀬あれが狂言を勤めるか。あの今日も御
所で見たやうな八まん大名。太郎冠者を
やるぢやまで。フシ。どれ顔見よう顔上
げい。ヲ、顔も好いわ。今から鼻が抱へ
る程にさう心得。是は、有難い無調法
な女の藝。勘解由様鳴瀬御夫婦様のお
見出しに預り。御奉公に參るやうにとの
お詞。辭退も申さず只今のお目見え。
ほんに冥加に叶ひし仕合。此上ながら幾
久しうお目懸けられて下さりませと。會
釋作れば何ぢや。目を懸けてくれ。ハレ
變つた事を願ふな。屋敷へ歸つたらば下
下に言ひ付け。鎖斤を取寄せてかけてく
れう。むつちりと肥えて居る程に十二三
貫は儲にある。まあ年恰好が氣に入つた。
廿四五は女房の油乗る最中と。何やらの

書物にあつたが。なんと鳴潮。女房の油
 といふ物を此大藏は終に見ぬが。どの様
 な油ぢや嘸好い香であらうなあ。又殿様
 のあやない事。いやなうお京女郎。あの
 様な事仰ある悪かしいお生れ付。夫故
 そもじをお傍に置いて。狂言をお目に懸
 ける心はの。秋大名の粟田口のと。す
 べて上々のお心の。足らはぬ事を作つた
 もの。夫を御覧に入れたらば自然と心に
 お耻ぢなされ。物の辨もある道理。そな
 がら御意見になるまいものでもな
 いものと。夫勘解由にも言聞せ自が思ひ
 付。懾りながら御前にも。随分狂言を
 御覧なされお心を御遊ばせ。何ほお
 位様でも。のつとりでは濟まぬ世の中御
 合點遊しませと。フシ越に觸らぬ諫の挨拶。
 フウのつとりには狂言見るが療治か。

屋の床机に坐し給へば。途中ながらも主
 命は。厭とも言はれず立上り。宇治の
 さらし。鳥に洲崎に立つ波を付けて。は
 んま千鳥の友呼ぶ聲は。ちり／＼やちり
 ちり／＼やちり／＼と散り飛ぶ所
 に。鳥陰よりも。櫓の音が。からり。こ
 ろり。からり。ころりと。漕出して釣す
 る所に。釣つた所が。面白いとの。ヲ
 ヲ面白く。一段と氣に入つた。扶持
 をくわつと。哭れうぞとはやお心も狂言
 に。乗物召さるゝお京を召す詞も直に。
 太郎冠者のお京あるかやい。ハア。お
 前に。次郎冠者の鳴潮あるかやい。ハア。
 お前に。ハッハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

よ。薄よ女郎花。媚き立てる。乗物の跡
 に。随ひ。行く秋の。
 蝶や我。我や蝶かと。夢の世を。悟り
 極めし人ならで。うつら／＼と世の中を
 夢に暮して現なき。一條大藏の卿の館に
 は。今宵も始る狂言燕し舞臺は常の御居
 間先。廊下を直に橋懸書院を榮屋鏡の
 間。輝く錦の揚幕に菊燈臺も照添ひて。
 奥にはどつと襲むる壁。狂言満て、幕け
 させずつと樂屋へ入間川。大名烏帽子に
 榻櫛の姿なまめくお京が役。ほんに狂言
 なればこそ。誰あらうぞ八劍勘解由様の
 が太郎冠者に使ふと思へば。どうやら氣
 の毒。是がほんの逆様事取も直さぬ入間
 川。御赦されて下さりませ。是は改つた
 御挨拶。私がやうな鈍な者が。對手にな
 つて間を合すもこなさんの皆お蔭。御師
 匠様にさう言はれるが矢張是も入間語。

何なりと目見えに一曲。所望々々と茶

初めの供先や首尾を窺ふ鬼次郎が。心も
 落付く心のさらば。一寸睡き顔き合ひ萩

稽古をさせて下されもなされねば。狂言を覚えもせいで。御前でも勤も致されば御褒美にも預らいで忝うもござりませぬ。いえな申しさう仰しやつても下されねば。却つて迷惑にも。互に笑ふ折柄や。播磨の大掾廣盛公御出でなりと知らせるにぞ。奥へ取次ぐ女中の成鳴瀬お京は四番目の。役儀を急ぐ二千石を揚幕へ切らして、奥へ行く。跡へ入来る播磨の大掾。八劍勘解由出迎ひこれは、珍らしき御入來。幸ひ只今狂言殿中。直にあれへ御越しなされ御見物と。先に立てばイヤナウこれ勘解由左衛門。夜陰に及んで大藏へ見舞といふは付けたり。誠は貴殿に逢はん爲先づ下にお居やれと聲を滑め。かねて申し通する如く。呑込まぬは常盤が心底何故とお言やれ。いかに清盛の御意なればとて。三國の大白痴と。

名にうてた大藏を夫と頼むは深い計略。義朝が悴を招き源氏の討洩されを語らひ。平家に對して恨を爲す工がなくては叶はぬ筈さ。此間にも常盤が素振に不審がましい事はなきか。仰までも候はず。常盤が身の上萬事に心を付けけれども。さして變りし品もなし。併し爰に一つの不審と言つば夜々の楊弓。宵は物事騒がしとて夜半過より弓三昧。是を屹度推量すに。主人大藏が白痴を嫌ひ枕を交すまい其爲。夜を更しての楊弓ならめと。語れば廣盛肩を聳め。いや、左様の事ではあるまじいかさま夫には仔細あらん。心を配り氣を付けて何に寄らず注進あれと。互の心腹し合ふ詞の内に奥の間は、早くも納る二千石。二人の女にかしづかれ大藏の卿立出で給ひ。廣盛殿お出で。此間は打絶え六波羅へも參らぬが。變つた事もをりないか。

折節には參りたけれど。小松殿がマアむづかしい。灘波瀬尾が顔見ると。めいよ、う其儘麻痺が切れる。いつちまだ外見と違ひ附合の成るは能登殿。某さへ見ると目出たい人。旨い仁と嬉しがつて。機嫌が好いと。眞顔の挨拶。廣盛脇道へ連れて。ア、くくく。承れば此頃は狂言をお好み稽古の由一段のお慰み。いつぞは拙者も所望申し拜見が致したい。エツエ。もそつと早うお出であらば。此二人の者どもが二千石をやりをつたにハレ殘念。何が此お京めが床几にちやんと腰を掛けて。ハアそれ。今の論の所は何とやら。ヲウそれ。吾天下一統の御代となすも。偏に論の徳なりとて。乾の角に墮をつき。石の唐櫃切つて据ゑ。一つ諷うてはどとど。納め二つ諷うてはどとど納め。唐櫃の蓋の。ふうわりふわり。ハツくさめ。廣盛ぢやくと心

を利しいざお暇。勘解由の内室宜しう執成頼むぞと。言捨て座席を立歸れば、勘解由も引添ひ立出づる。ヤア廣盛は去なれたか。ハテ氣の短い。此様な面白い事を見ずに。エ阿呆ではあるわいの。ヤイもう何時ぢや。大方九ツにもなるであらう。然らば例も女共が楊弓をやるる時分。身どもは寝間へすと遣入らう。果報は寝て待て旨い物は宵に食へ。言ひたい事は明日言へと立つにも居るにも狂言に。魂奪はれ心の闇。大藏卿にかしづきて皆々奥にへ行く空の、更け渡る。鐘の聲。人も子の刻はや過ぎて。次第に昇る月代も。足元遅き丑三ツ頃常盤御前の在します。一間の内は燈火を

ぬか秋草に。露も置き添ふ弓の弦。手に心やはりぬらん。空に館の外面を窺ひ足。腰にぼつ込む黒箱の色も名に負ふ吉岡鬼次郎。常盤御前の居間先とは目覺え強き高塚に。手を伸しても届かばこそ磔は忍びの案内者と。拾ひ集めて一握打込む小石ばらばら。糞られぬ儘にお京が耳へ懸しと入つたる知らせの小石。庭の飛石差足に。切戸の透間差覗けば。是はお京ぢやないか。さう言はしやるは鬼次郎殿か。俺ぢや、程錆付く鏝外れかね。きりきりか。外から急げば急

を付けるに。いつか大儀塵悲しさうな氣色もなく。髪形繕うて大藏卿に猫撫聲。何が又大藏卿は音に聞えたぬく太郎。流して甘やかしたせんさく。夫にほとびてあの如く夜すがらの楊弓。源氏の事を思ひ出す色目なければ。此お京は鬼次郎が女房と名乗らうにも折もなし。いや迂濶に名乗りだて。却つて鞍馬の若君の。お爲にも如何ぞと思つた故に知らせの文。出来た氣が付いた。しや口惜しや。鬼次郎が一生の目利違ひ結構人と呼べる、大藏卿の館へ。入込み給ふは天晴發明。源氏の味方を驅集め運の開くるときは御前と。頼もしく思ひしにあごくひ違へし淫奔女。其性根と知るからは其方をうかく、此屋敷に。直に連歸らう。とても性根の亂れた常盤。主でない家來でない。思へば穢れし此屋敷。心も残らぬいざ行かん

りぶらはちりもん、松蟲の。聲かあら

に腰障子。照す的の星。影は此方に。心底、一向大藏に身を任せ。源氏の事は思ひも出さずと知らせの文。愈々夫に違ひはないかさればいな。此間起居舉動に心

と思ひ餘りの憎て口。切戸の口に立戻れば障子に映る楊弓の。矢は眞直でもあれあれ。歪んだ性根の影法師憎さも憎し面耻かゝせ。存分言うて立歸るが義朝公へせめての追善。サア來い女房心得ましたいご御座れと。續いて上る廣縁の障子蹴たつる破れかぶれ。射前の先に突立ちたり。常盤御前は一心不亂勝負も振らず固める手前。いと悠々と引詰めて狙ひ程好く放せる矢は。かつしと響きて雑穴に羽ぶくら込めて止るにぞ。嬉しや願は通矢とッしたり顔なる御氣色。鬼次郎さしも耐へかねつと寄つて弓引奪り。ヤアをさめ過ぎた耻知らず。吉岡鬼次郎幸胤よも見忘れはあるまい。お京といふも則ち女房夫婦の者が心を碎く。其効もなき人でなしと怒れる聲に顔振上げ。ヤア珍しい鬼次郎。楊弓に心移し居て何時の間に見えたやらと。言はせも

果てず堪へぬお京。コレ仰しやるな常盤様。あまちこい滅す口開いて居る主でないぞえ。エツエほんにお前はなあ。此楊弓をなさるゝ手間で何故に誠の弓を張り。心の鋒矢引詰めて。源氏の恨を霧さうと思ふ心は何故付かぬ。大事のく義朝様のお情を忘れて。二度三度嫁入なさるゝ。其氣では其苦ながら天道は怖うないか。恐ろしうは思さずか人の報は遠からぬ。七間半の楊弓より當りは近い天の罰。神や佛に憎まれてもお前は何ともないかいのと。涙交に言並べる。心の直矢ぞ誠なる。常盤御前は打領き。尤の恨事悪うは聞かぬささりながら。世の中の人の心の竹ならば。割りてや見せましと云ひけんも外ならず。主を大事と思ひ詰めし。誠の道は道ながら家來は家來の程々にて。深きに至らぬ小笹の茂り。主人は主人の心にて。千尋の竹の大籤は。

外から知らぬ。理と氣を持たせたる詞の下。ウ面白心の竹。此鬼次郎が今こゝで打つてく打碎き。歪んだ竹の節を見せう。いや慮外者推參者。家來の身として見ん事其方は。ヲ、主人でも。打ちかねぬ鬼次郎。と言ふ間もあらせず持つたる弓。振上げて丁々々。其むさい心の竹灰吹竹にしてくれんと疊みかけて打つ腕。もうよいわいと女房が留むるを突退け又丁々。腹立つ息をつぎ弓の弮も。碎け飛散つたり。常盤御前は起上り。髪搔撫でて襟繕ひ。ヲ、出來されたり頼もし。時代に伴るゝ人心裏の裏なる恐ろしさ。木にも置にも心置かれ深き疑ひ赦してたべ。我を憎しと思ふよりなぐり情もあら弓に。たゞ伏せたる主思ひ。誠が顯れ嬉しいぞや。今まで秘む常盤が胸。語り明す。耻かしさ。取分きて悲しきは二度三度の嫁入と。

姫御前が姫御前に侮蔑する、面目なさ。

武士の身の上に。臆病者よ。腰拔よと指さるるによも劣らじ。辛きは忘れぬ昔語り義朝公に別れしより。長遠忘れ形見の三人の若兄は六ツ中は四ツ。弟はまだ乳香子の。泣音を忍ぶ伏見の里雲の下折消えやらで。つれなき命を足曳の大和の宇田まで逃退きしを。終には捜し出されて。ヌエ疎ましや清盛が。我に無體の戀慕の闇。我は子故の闇々と口説落され女の道。捨て、拾ひし子供に命。ア、歎くまじ思はじと思ひ流せど憂や辛や。夫の敵の清盛に枕並ぶ私語。虎狼の叫ぶより耳に徹て物凄く。錦の褥も。悪魚毒蛇の鱗に寝臥する心。君傾城の。勤めさへ。厭なと思ふ男には振るとやら逢はぬとやら。夫には劣りし我が身の因果よし是も我子の命。助かりし代りぞと心で心取直し。辛きながらも添寝の床。泣きた

い涙笑うて見せる。胸の苦しさ。遺瀾なき。如何なる地獄の責なりとも此辛さには勝らじと。思ひ暮せし年月も。隠し秘む心の底夫さへ切なかりつるに。今といふ今夫婦の業に悲しい有りだけ打明けて。今まで胸に湛へたる。思も涙も打流し。嬉しいわいのと。憂さ辛さ語るに。も猶涙なる。鬼次郎も哀に服し。怖るる心取直し。御物語さる事ながら。清盛の手を遁れ此館にましますは。時節の到ると申すもの。それに何ぞやうかくと明し暮して遊興業。朱に交れば赤うとやら長袖の家に馴れ。武家の育を忘れ給ふ。浅ましさと怨むにぞ。ヤレ女でこそあれ。義朝公の御胤をも産落したる自ら。平家に恨の一念は心に込めし此楊弓。慰みに事寄せて誠は平家を。調伏の。弓矢ぞや。弦を白き絹に巻きしは。源家の白旗押立て。本弾末弾鳩頭。

正八幡を頭に戴き。敵に向ふ。心ばせ。弓矢の尺は二尺八寸。二十八宿の星と敬ひ。九曜を象る九寸の矢尺。やたけ心を張詰めて。一矢は今若乙矢は乙若。牛若が名に寄せて丑の常盤が時節。フシ三つの鐵輪は。あらねども曠志の燈火照せる夜弓。念力透つて我が願ひ思のまゝに金貝の。矢数は一百五十一。女に二挺の弓を引かせし名は清盛の。清からで身體を汚せる泥書。百四十九の骨々も。ハズ、碎けよ。折れよと怒の炎。赤き朱書の九十くげんを見せしめ給へと祈つたる。狙ひの矢先は雉穴に。丁ど射付けし調伏ぞと。的の釣糸かなぐり棄て堀のくろかは取給へば。生けるが如き清盛の。姿を盡きし胸板に。矢疵は通りし女の一念。ツシ健氣にも亦勇まし。鬼次郎夫婦はつと伏し。此お心と知らずして。出る儘の悪口のみか勿體なくも打擲せし。某が此

面お足にかけられ踏み。にじつて給はるが此上の。エエお主の。慈悲と詫びるにぞ。なう鬼次郎忠義を思ふ諫の杖。打たれたる此弓は正八幡の御手を出し。我に心を勵まし。給ふと思へば。猶更有難し。とは言ひながら淺ましや敵にもせよ仇にもせよ。後の夫の名は通れず夫は天に誓へしもの。敬ひまつる心もなく女の際に恐ろしき。人を呪ひの楊弓は積る此身の未來の罪。奈落の底におちの矢の苛實の結界幾百手我が身は覺悟の上ながら。子供の身にや報はんと。思ひ案ずる悲しさを。推量あれとかき口説き。聲も涙も忍泣き鬼次郎夫婦もお道理と。涙のまき矢ばら〜と的に。亂るゝばかりなり。嗚瀨の聲の洩れけるにや。視ひ親ふ八劔勸解由つか〜と走り出で。件の繪委引抱へ。此證據を取るからは常盤主從通さぬ〜。六波羅へ訴へたつた今一

つ繩と言捨て、駈出す。此方の一間さらりと明け。何處へ遣らぬと立塞り。に鳴瀨がかひ〜しく。これ勸解由殿狼狽へてか。常盤様が科人なれば大藏様も同じ科。善にもせよ惡にもせよ。主人の難儀を訴人とは。武士の道は何處で立つと。言はせも果てすヤア黙らう。まの大だからが何の主人。豫て廣盛に心を合せ。常盤を初め大藏共に擲取り。一條の家は此勸解由が治める。妨げひろがば女房とて。赦しはせぬと突退け〜。又駈出すをこれ待つた。放さじ。遣らじと捻合ふ内。後の方の障子越勸解由が騒しつかと執り。ぐつと貫く刀の光うんと仰向に反りひびむ。障子の紙も紅に鳴瀨は驚く夫が苦み。常盤主從呆るゝばかり勸解由は無念に問ゆる手足。骨組あらき障子を掴みばつたばたつく効もなく。己が名字の八劔に、身を果すこそ淺まし

き。鳴瀨は泣くにも泣かれぬ思ひ。惡の報ひを忽に見するは誰そといひつゝも。鬼次郎諸共立寄りて。間の障子を取退くればさも悠々と大藏卿。日頃に變る御氣色に目の内涼しく刀提げ。突立ち給ふ御装げにも威ゆつて猛からぬ仁義の勇士名將と。初めて知らるゝ人々は、あつと敬ひ恐入る。大藏卿靜々と。御佩刀を鞘に納め。心足はぬ長成が。辨へもあらすして勸解由を討つて捨てたるかと。鳴瀨が悔みもうたてさに語り聞かすよつく聞け。元來某源家の累葉。仔細あつて長袖に交り。一條大藏長成と呼ばれ。人並々の身なれども文武の道も表に出さず。若年よりの作り阿呆痴人となつて世を暮せば。源氏にも愛せられず又平家にも眠まれず。世を語はぬ我儘暮し。夫を知らざる八劔勸解由。主人を白痴と見限りて。廣盛に心を合せ。非道の工疾くより

も睨み付け。憎くい奴と思へども是しきにア、世話と知らぬ顔に捨置きしが。見通しならぬ今夜の仕儀。三十年來長成が作り込んだる拵へ馬鹿。顯したるは、源氏の爲。ヤア鬼次郎夫婦我が詞を能く守り。牛若とやらんに傳へてたべ。人間の盛衰は只天運の爲す所。六條の判官爲義は己が智謀にからまされ老の一圖の片意地に其身を終に亡しぬ。同じく左馬頭義朝武勇に誇り時節を知らず。待賢門の夜軍より野間の内海に落行きて。詰腹切つたる無念さは如何ばかり。親といひ子といひ孰れも、智恵自慢武勇自慢に可惜身を今更惜むに効ぞなき。此人々には事異り出来されたるは常盤御前。唐土を尋ぬるに操を立て、名を残す女は類多けれど。夫の爲子の爲に不義者の名を取つて。女の道に背きしは則ち背かぬ貞女の鑑。異國の人も傳へ聞かばなどは

是を賞せざらん。斯る希代の女房を宿の妻とは身が果報。阿呆に繪のつく長成が命に懸けて預つたり。心安かれ鬼次郎夫婦猶牛若に心を合せ。再び源氏の耻を雪げ。何事も大藏は知らぬ顔なり白旗の。榮えを見せよ方々と。残る方なき御詞。フ世に頼もしく有難き。調の内に勘解由が妻。夫が死骸の差添押取り。咽喉にがはと突立つれば。人々はと取付けどもはや貰いたる刃の柄に。手は懸けながら目を開き。浅ましや勿體なや。心惡な御主人と。年月悔り暮せしさへ大方の罪なるに。惡事に與せし我が夫お手討に逢ひたるは。まだも冥加に叶ひし最期御手に懸り死したればこそ。一大事の御物語。聞いて嬉しき此鳴瀬。心は夫に與せねども。此御大事を聞く上に。一日でも存へては。外へや洩れんと人々の御疑ひの悲しさと。地一つは二世と契りた

る夫の跡追ふ死出の旅。冥途にて廻り逢ひ。意見を加へ善心に翻させ。せめては草葉の陰よりも。御恩を報ずる御奉公。させたい爲に此自害。只何事も御赦されて。下さりませいを此世の名残。夫の死骸を枕にて眠れる如く息絶たり。大藏卿を感じ給ひ。天晴健氣の鳴瀬が最期惜いかな。と言うて今更歸らぬ道。猶此上も大藏は元の阿呆に立歸り。源氏の旗を揚ぐる迄は時めく平家の無理我儘。避けて通す結構者。鼻の下の長成と笑は、笑へ言は、言へ。命長成氣も長成も。只樂みの狂言舞。ヤマウ曉の明星が。西へちろり。東へちろり。ちろりくとする時は。あれく。夜明に間もあるまじ。鬼次郎夫婦イケイノイヤア。去のとも戻るとも。何とも其方の御計ひと。言うては小腰に抱着いた。名残はきりゃんない。きりゃん。限らないとナホス小舞

に事寄せ暇の詞。ア、有難き御心。お禮は如何も盡されずと、ユエテ頭を下ぐれば。

禮に及ばぬとつと、往いかしませ。地如何なる奇縁かかく迄も御情深き御恩の程。嬉し涙にお京が名残。又廻り逢ふ常盤様。必ず歸り鬼次郎も。さらば〜と立出づれば。コレ〜お待ちやれ儀別申さう。コレ此太刀は重代のわざ物。汝

に與れるぞ。地ハツと敵き別の袖。急げ急げに氣もいそ〜悦ぶ中にも不便さは。未來を何と鳴瀬が爲。狂言綺語も法の聲。識佛乘の因縁にて蓮の臺に今参り。我は元より鈍太郎と浮世を化す釣狐。

大藏が家の藝。鷲の白旗泉の源。常盤の松の榮えを見んと言葉の花子末廣り。實にもさうよのやよげにもさうよの。さうよ〜と囃し立て。心拍子に勇み行く誠の。道こそゆゝしけれ

第五

生きて功名をなさずんば馬皮に包まれて。古里に歸らんとは勇士の心なるをや。吉岡鬼次郎幸胤は嵐烈しき夕の空。雨の玉散る横しぶき傘片手に小提灯。忠義の草鞋脛高く引揚げたる身の仁義。五條の橋に差かゝれば。向ふへ来るも同じ扮装。提灯さし上げ透し見て。地ヤア鬼三太か何處へ行く。されば〜牛若君又義朝公孝養の御爲とて。此橋にて千人斬を始め給ひ。今夜も暮前より忍び出でさせ給ふ所。承れば平家より隠し討手を出だす由。地萬一過ちあつては大望の妨げ。御供申し歸らんと是迄参上仕る。地ム、これは〜我とても其通り。地一條大藏卿の仰越されし仔細もあり。かた〜もつて若君の御目に懸りたく是までは來りしが。地汝が來る道東では見當らずか。

いや此方にも尋ね逢はずか。現は未だ此所へ見え給はぬな。地待受けて連歸らんと。橋の傍の柳蔭。心配つて待居たる。フシ五條あたりの。黄昏に。それかあらぬか夕顔の。花を。欺く衣打被き。雨に照添ふかさの名も紅葉の鼻精塗木履。足音竊に忍び来るはこそと兩人立寄り。申し〜牛若君。今宵は折も宜しからず。直にお歸り然るべしと。言ふに薄衣取給へば。ヤア。是は皆鶴姫。思ひ懸もない事。此雨風の烈しきに何故と尋ねれば。今の詞も聞くからは御兄弟も若君を。連れまじに御出でか自らとても此通り。今宵は無用と留めしに振切つて出給へば。跡を慕うて参りしと語れば鬼三太打領き。御尤も〜。まだ御目には懸らぬが今宵は是非に留め申す分別。併し我々兩人が何程に申しても雀の千聲。皆鶴姫の一聲は利が強いと打笑ひ

フシ暫く見合す折柄に。地六波羅の方よりも數十本の高提灯。播磨の大掾廣盛手勢の雜兵引具して。皆鶴姫の姿を見付け件の童め遁さじと。言ひも敢ず群り寄るさしつたりと鬼次郎兄弟。傘投捨て抜く太刀の光に亂るゝ雜兵ども。二打三打は支へしが堪りかね大將諸共。河原表へ逃行けばきほひにきほふ鬼次郎鬼三太。皆鶴姫を彼處に忍ばせ跡を慕うて。三三キイ扱も源の牛若丸。父の修羅の魂魄を慰めん。と。川風添ゆる夜嵐の夕程なき。秋の空。ナホス面白や。心浮立つ御扮装。肌にはねりの御袴。紅裾濃の御着背長ハズイ糸算織の大口に。コッ薄紗といふ御佩刀。五條の橋を指して來る。かさのしぶきも高足駄。板橋とどろと踏鳴し。行交ふ人を待給ふ御有。様ぞフシ不敵なる。地夫と見るより皆鶴姫するゝと走り寄り。何處に何うして今ござんした。又同じ事言ふ

かとお呼られうか知らねども。地今宵は是非にお歸りと袖に縫ればア、これゝ。女女の身のはしたない。こゝまで跡を慕ひ來るとは人の見る目も如何なり。地如何程にの給ふとも思ひ立つたる事なれば。此儘では歸らぬゝヲ、情強。地ふではなけれども。父御様の孝養ならば善根はさまざま。地仕やうもやうも多いのに科もない往來を。千人斬つて功德になるとは何といふ經にある事ぞ。末に大事を抱へながら大膽なお身持。殊に今宵は平家より討手の大勢。鬼次郎兄弟の業が出逢ひ。あれあの騒ぎはお耳へ入らぬか。大事の前の小事なれば拜みますゝ。今宵は戻つて下さんせと。地しみゝ縫りくどかるゝ。地これ今ならで有りやうは言はぬ。千人斬とは偽り何の科もない人を斬らうぞ。毎夜々々此橋へ來るは往

來の人の中にも。武士たる者に當つて見。器量なき奴は逃げ次第。狼狽へて斬らるる奴は斬れ損手に立つ者は從へ靡けし其中にも。熊野の龜井鈴木兄弟を始め。伊勢の三郎江田の源藏。熊井太郎などいふ源氏の運を開くべき。時節を待ちし誼の者其外彼は昨夜まで。九百九十九人まで大刀の下に。從へ懐く。地今一人手に付ければ千人の家來を持つ諍う言やんな今一人手に付けぬ其内はいつかな歸らぬ。殊に鬼次郎兄弟が平家の討手に出逢ふと聞きながら。見捨てゝは本意ならず力を添へんとの給ふ所に。物こそ見ゆれ此方へと皆鶴姫を引連れて。フシイみ休ひ給ひける。地西塔の武藏坊辨慶は。其頃都に在りけるが。五條の橋には人を惱す曲者ありと聞きしかば。それを從へ召使はんと。心も空も晴るゝ夜の月も音羽の山の端に。出立つ鐘は黒華威好む所の道具に

は熊手。ない鎌鐵の棒。さい槌鉾鎧刺股
さす儘に。播現より賜つたる大薙刀。眞
中取つて打掃きゆらりと出でたる有
様。如何なる天魔鬼神なりとも。面を向
くべきやうあらじと。我が身ながらも物
頼もしく手にたつ者のア、欲しやと獨り
言して打渡り向ふを。ききつと見てあれ
ば。薙橋のほとりの青柳の糸より細き腰
付にて。すつくと立つたる女姿かさ傾け
て面はゆぶり。辨慶元より法師の身女
に何と言懸けん。詞も媚く氣色に耻ぢ。
橋の傍を過行けば。五月若君彼を賜つて
見んと右へ避ければ右に立つ。左へ行け
ば左に行く。違ひさまに薙刀の柄をは
つしと蹴上ぐれば。薙刀はしれ者よ物
見せんと。薙刀柄長く押取延べ。切つて
かゝれば若君は。薄衣取退け打寄する。
ひらりくる／＼／＼車に揉まるゝ牛若

丸。辨慶荷つてさそくをふみ。遁さじ
ものと切込むを。丁と受けたる勢は。雨
を起せる蛇の目の傘。下。風吹き拂へば
飛びかはし。ひらりと抜いたる小太刀の
影。星の光と水車。所は名に負ふ加茂川
の。流れに立つ浪どう／＼。どうど
寄すれば白鷺の。葦邊にあさる片足立
姿はつくばね羽子板の。拍子は碓の音。
むさうがへしうつゝの太刀。二つの鏝音
から／＼。欄干傳ふさゝがにの。
蜘蛛のへ振舞木傳ふ猿。水の月かや手に
溜らぬ。姿を慕ふ薙刀の得たりや應と確
と執り。橋の擬寶珠玉の汗鏡を削りて。三
ひける。辨慶秘術を盡せども終に薙刀
打落され。組まんとすれば切拂ふ縫らん
とするも便なく。詮方なくて橋桁を二三
間飛退り。呆れ。果てし立ちたる所へ。
鬼次郎鬼三太取つて歸しヤアそれなる

は辨慶ならずや。書寫の寺にて別れし
より忍び／＼に尋ねしが。今までは何處
に在りしぞ。ヤア是は鬼次郎殿。播磨の
書寫を出でしより方々うろたへやう／＼
と。叡山の西塔に籠り時節を窺ふ武者修
業。今宵あの草めに出席ひ此仕合。サ
ア來い童と大手を擴げ。掴みかゝらん其
勢。ア、これ／＼。此御方は我々が御
主人。源の牛若丸と。此言ひも取ぬはつ
と退りハツア道理々々。此辨慶に大汗
かゝすは大抵の人でないと思た。今よ
り後は御家來可愛がつて下はんせと。
頭を橋にぞ付けにける。扱は聞及ぶ辨
慶な。我も汝を慕ひしに嬉し／＼。縁
は重る武藏坊今より三世の主従ぞと。約
束長き五條の橋。橋辨慶と末の世に語り
傳へて繪にも書き。祇園祭の山録にも。
祝ひ飾るは是とかや。皆鶴姫も立出で
て互の悦び若君も。御機嫌料ならざる所

へ。廣盛を初め軍兵ども取つて歸しをめて蒐れば。鬼次郎兄弟心得たりと拔連れく勇みかゝる。辨慶押留めこれく兄弟。其廣盛は存じの通り此坊主が親の敵。貴様達が手に懸けんとは情なし我にくれよ。サア廣盛お尋ねの辨慶是に在り。追付け汝を冥土へやる。死脈が打つか取つて見よと腹打叩いて笑ひける。廣盛怒つて家來どもアレ通すな討つて取れよと下知するにぞ。群りかゝる數萬の兵。

ヲ、面白い辨慶が七つ何事ないやうに七つ道具をくれんと。手んでに得物を鬼次郎鬼三太。押取りく打ちなぐれば木の葉を時雨に誘ふが如く。一騎も残らず逃散つたり。残るは廣盛只一人。今更逃ぐるに行方なく顛ひ縮むを引出し。汝は己が親殺し。仕置を見よと橋詰へ高手小手に縛り付け。一つ残りし鋸びきもろ手をかけて一引き二引き。えいや

えいやの懸聲に頭は前に落ちてげり。人々どつと打笑ひ若君の御供し。勇みに勇む奥州下り終には平家を打亡し。源氏の御代と榮えるも牛若君の劍の徳。さやの尾にある虎の巻。鬼一が護に鬼次郎鬼三太一騎が千騎の武藏坊。辨慶が勇力に大藏卿の智恵の徳。常磐の松もあひにあふ千人斬の千の字を。千に重ねし國津民。萬々歳の悦を諷ふも。目出たきためしなり。